

青森県埋蔵文化財調査報告書 第197集

# 西張(3)遺跡

平成7年度

青森県教育委員会



にし　はり  
西 張 (3) 遺跡

—東北新幹線建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 7 年度

青森県教育委員会



# 序

馬淵川の流域には、多くの埋蔵文化財包蔵地が分布しております。

この報告書は、東北新幹線建設工事(変電所)に係る福地村西張(3)遺跡を発掘調査した結果をまとめたものであります。本遺跡に関する調査は継続中ですが、今回の調査によって、縄文時代の竪穴住居跡や遺物などの様子が明らかになりました。

この成果が、今後、文化財の保護と活用、とりわけ郷土史の資料などになれば幸いに思います。

ここに、調査の実施から報告書の刊行まで種々ご指導、ご協力いただいた調査指導員をはじめ、関係各位に対して厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

青森県教育委員会

教育長 松 森 永 祐

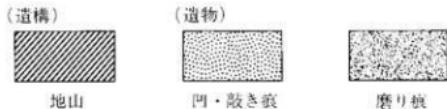


## 例　　言

- 1 本書は、平成6年度に発掘調査を実施した三戸郡福地村に所在する西張（3）遺跡の調査報告書である。
- 2 本遺跡は、平成4年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に遺跡番64034として登録されている。
- 3 執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に記してある。
- 4 資料の分析、鑑定については、次の方々に依頼した（順不同、敬称略）。

遺跡周辺の地形と地質	八戸市文化財審議委員	松山 力
石器の石質鑑定	八戸市文化財審議委員	松山 力
	青森県立板柳高等学校教諭	山口 義伸

- 5 本書に掲載した地形図（遺跡の位置、周辺の遺跡）は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図及び福地村管内図の5万分の1の地形図を複写したものである。
- 6 描図の縮尺は、図ごとにスケールを付した。なお、遺物写真の縮尺は、不統一である。
- 7 遺構・遺物の文・図中の表現は、原則として次の様式・基準によった。
  - (1) 遺構内外の堆積土の注記は、『新版標準土色図』（小山正忠、竹原秀雄 1993）を用いた。
  - (2) 各遺構の規模については、それぞれ最大値を計測した。
  - (3) 図中で使用したスクリーン・トーンの表示は下記の通りである。それ以外については各図中に示した。



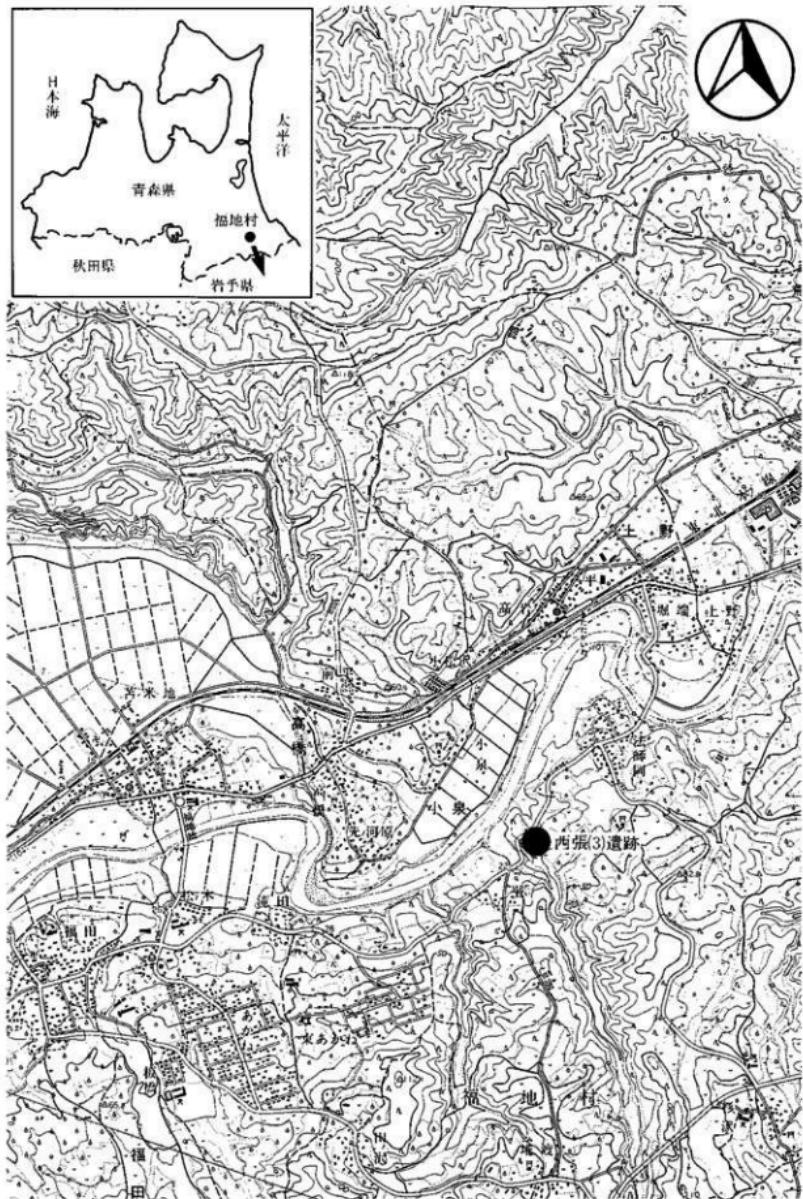
- 8 引用参考文献については本文末に収めた。文中に引用した文献については、著者名・編集機関と西暦年で示した。但し、報告書についてはそのシリーズ番号を記載した。
- 9 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の機関と個人から御教示・御指導をいただいた（順不同、敬称略）。

八戸市教育委員会、三沢市教育委員会、  
佐々木浩一、長尾正義、鈴木徹、瀧澤幸長、橋本正信、田中寿明、村田大、富永勝也、佐藤剛  
菊池信



# 目 次

序	
例 言	
目 次	
第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第Ⅱ章 調査の方法と経過	2
第1節 調査の方法	2
第2節 調査の経過	4
第Ⅲ章 遺跡の環境	6
第1節 遺跡周辺の地形と地質	6
第2節 周辺の遺跡	11
第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物	14
第1節 縄文時代の遺構	14
(1) 竪穴住居跡	14
(2) 配石遺構	14
(3) 土坑	16
(4) 溝状ピット	18
第2節 縄文時代以外の遺構	20
(1) 漆跡	20
(2) 溝状遺構	20
第3節 遺構外出土遺物	25
(1) 土器	25
(2) 土製品	27
(3) 石器	35
第Ⅴ章 まとめ	41
引用参考文献	
写真図版	
報告書抄録	



第1図 遺跡の位置

(縮尺25,000分の1)

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経過

東北新幹線盛岡以北の工事に伴う県内の埋蔵文化財発掘調査は、三戸郡名川町に所在する日渡遺跡が最初である。日渡遺跡の発掘調査は、平成5年4月12日から同年6月25日まで実施された（県埋文報第162集）。

ところで、本遺跡と関係が深い西張(1)・(2)遺跡は、「県埋蔵文化財包蔵地カード」（遺跡台帳）によると、昭和39年（1964）にその一部が発見されていた遺跡である。また、昭和48年と49年に、現在県埋蔵文化財調査員に委嘱されている橋本正信氏によって確認されている。

平成3年度になって、日本鉄道建設公団の東北新幹線建設計画に伴い、県教育委員会では、事前の遺跡分布調査を実施して、本遺跡を再度マークした。そして、これまで遺跡台帳では、西張(1)・(2)遺跡の位置関係は明確でなかったが、平成4年度に改訂した「青森県遺跡地図」の作成時に現在のように整理されたものである。

そして、平成6年8月には、県教育庁文化課による試掘調査が実施され、本遺跡の調査対象面積がほぼ確定したものである。

（北林八洲晴）

## 第2節 調査要項

- |            |   |                           |
|------------|---|---------------------------|
| 1 調査目的     | 東北新幹線建設工事の実施に先立ち、当該地区に所在する西張(3)遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。 |                           |
| 2 調査期間     | 平成6年8月22日から同年11月18日まで   |                           |
| 3 遺跡名及び所在地 | 西張(3)遺跡（青森県遺跡番号 64034）<br>青森県三戸郡福地村大字法師岡字大道ノ下16-4, 外                      |                           |
| 4 調査面積     | 3,700平方メートル（調査終了面積 3,900平方メートル）   |                           |
| 5 調査委託者    | 日本鉄道建設公団盛岡支社  |                           |
| 6 調査受託者    | 青森県教育委員会  |                           |
| 7 調査担当機関   | 青森県埋蔵文化財調査センター  |                           |
| 8 調査協力機関   | 福地村教育委員会・三八教育事務所  |                           |
| 9 調査員等     |   |                           |
| 調査指導員      | 村越 深  | 弘前大学教授（現、青森大学教授）<br>(考古学) |
| 調査協力員      | 下川 勝義   | 福地村教育委員会教育長               |
| 調査員        | 松山 力  | 八戸市文化財審議委員<br>(地質学)       |
| 〃          | 市川 金九   | 青森県考古学会会長<br>(考古学)        |

調査員 小林 和彦 八戸市縄文習館（八戸市博物館是川分館）主査兼学芸員

(考古学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課 総括主幹

課長 北林 八洲晴（現、副参事）

主査 伊藤 昭雄

主事 下山 信昭（現、主査）

主事 長瀬 升（現、階上町立大蛇小学校教諭）

調査補助員 高橋 昌也、田中 権、山田 尚美

(北林八洲晴)

## 第II章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

調査開始にあたって、新幹線建設用の中心杭No.30を基準点（AA-50）とし、それぞれの中心杭を結ぶ南北方向の基準線をAAラインとした。中心杭No.30でAAラインに直交する東西方向の基準線を50ラインとして4m四方のグリッドを設定した。各グリッド杭の呼称は、中心杭No.30（AA-50）を基点として、東へAB、AC、ADの順にアルファベット文字を付すこととした。また、北へ51、52、53、…、南へ49、48、47、…の順に算用数字を付して、アルファベットと算用数字との組み合わせで示した。具体的には、そのグリッドの南西隅の基準杭の表示によるものとした。なお、グリッドの南北方向の基準線は、磁北から15度東へ傾いている。

測量原点（ベンチマーク）は、法師岡の丘陵地に存在する三角点（82.8m）からレベル移動を行い、調査区域内に数箇所設定した。

調査にあたっては、遺跡の土層の堆積状況を観察するために適宜セクションベルトを設け、グリッドごとに掘り進めていった。

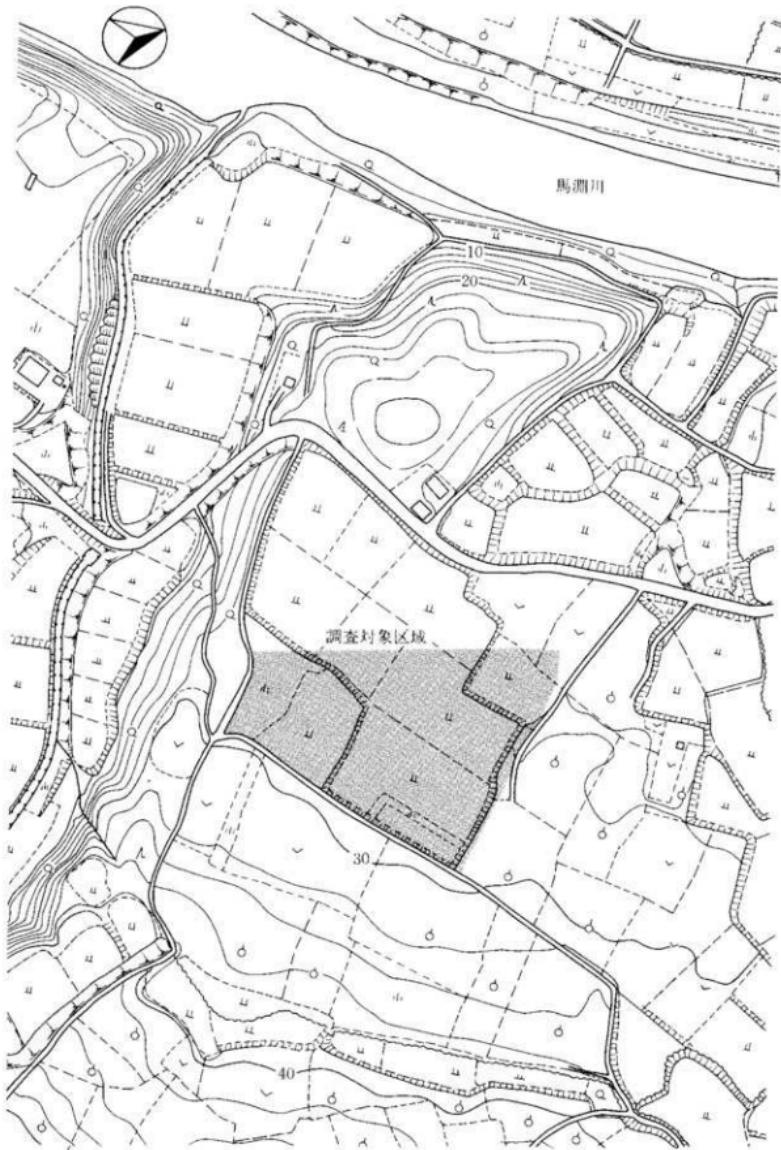
遺構の調査は、原則として二分法・四分法で行い、土層を観察しながら精査を進めた。遺構実測図の縮尺は、10分の1、20分の1を必要に応じて使用した。

遺物の取り上げは、グリッド単位に層位ごとに行い、必要に応じて平面図を作成し、レベルを記録することにした。

土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を各々付することにした。土層観察にあたっては『標準土色帖』を用い注記した。

写真撮影は、適宜行うこととし、カラー・リバーサルとモノクロームの2種類のフィルムを使用することにした。

(下山 信昭)



第2図 周辺の地形

(縮尺2,500分の1)

## 第2節 調査の経過

平成6年8月22日、調査区域内の環境整備及び草刈り作業から調査を開始した。午後、調査機材が到着し、機材の搬入及びプレハブ内の整備を行った。調査区域内は、旧水田地及び畑地であり、一部荒れ地もあった。

2日目よりグリッドの設定及びベンチマークの移動と設定を行った。草刈り作業とグリッド設定の終了後粗掘を開始した。粗掘は、調査区の北側及び南側の畑地を中心に、4m四方のグリッドを間隔をとりながら行った。

水田部分は、整地により遺構等が破壊されている可能性があるため、9月5日～7日にかけて重機（バックホー）でトレンチを掘り、範囲確認することとした。その結果、水田部分は山側を削り谷側に盛り土されており、調査区域内の水田部分の大半が削平されているため調査不必要と判断した。

9月13日、調査関係機関の担当者、調査指導員、調査員等の出席のもとに発掘調査の打合せ会議を南郷村四ツ役・畑内遺跡と合同で開催した。会議では本事業の概要及び発掘調査要項の説明と発掘調査の方法等について協議し、共通理解を図った。会議終了後、現地踏査を行い発掘調査の進捗状況について確認した。

9月下旬、調査区の北側（りんご園）で溝状遺構が検出された。溝状遺構は、精査中に2条であることが確認された。その後、溝状ピットも1基検出された。

9月30日、台風26号接近のため作業は中止とした。

10月初旬、調査区の北側（畑地）に縄文時代後期の土器片が集中して出土するエリアが確認された。また、調査区の南側（畑地）には縄文時代早期の土器片が分布していることが確認された。縄文時代早期の土器片は、貝殻文と押型文の2種類があることも確認された。

10月中旬、調査区の南側（畑地）から溝状遺構が3条、南端部には濠と思われる遺構が検出された。また、縄文時代早期の土器片が出土した近くから、竪穴住居跡と思われる円形の落ち込みが検出された。遺構内から遺物は出土しなかったが、堆積土の状態から縄文時代早期以前の遺構であると推定された。

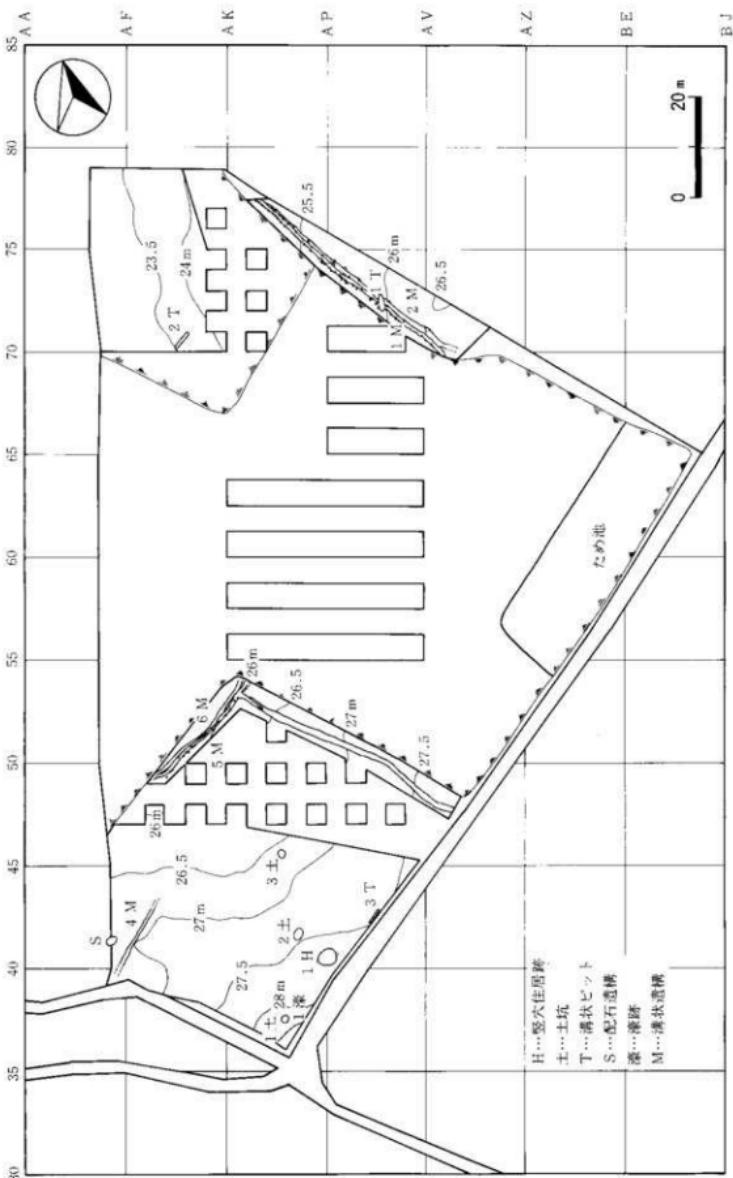
10月下旬、調査区の南側（畑地）から土坑（陥とし穴）及び溝状ピットが検出された。遺構精査は、11月初旬ではほぼ終了し、竪穴住居跡1軒、配石遺構1基、土坑3基、溝状ピット3基、濠跡1条、溝状遺構6条を検出した。

11月9日、ラジコンヘリコプターによる空中撮影を行った。

11月18日、後始末をして調査を終了した。

（下山 信昭）

第3図 通構配置図



## 第III章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡周辺の地形と地質

八戸市文化財審議委員 松山 力

#### 1 地理的位置と周辺の地形

西張(3)遺跡は、馬渕川の右岸にあって、背後(南東)から張り出す丘陵・段丘群の末端の、洪積低段丘面(田面木段丘)に展開している。

馬渕川は、岩手県葛巻町袖山に源を発する幹川流路延長142m(理科年表)の一級河川である。県境の三戸町からおよそ北東に下り、遺跡の西南西約4kmの福地村八木田付近で進路を東北東に変え、遺跡に接近する付近から東北東1km余りの鳥沢付近までの区間では、両岸の台地の間をくねるよう屈曲を繰り返し、八戸市橋引付近から3kmほど北に流れあと、幅広く開けた沖積地に入って北東に向かい、遺跡の北東およそ13kmの八戸湾に注いでいる。

遺跡の背後は、樺木(南東3km付近)周辺の丘陵地帯(海拔高度130~150m余、蒼前平段丘面)から杉沢付近(南東約2km、天狗岱段丘面)をへて、遺跡までだいに高度を下げる段丘群の斜面となっている。一般に、周辺地域の馬渕川の南東側には、馬渕川に並行するように幾段もの段丘が配列するが、平均的には馬渕川に向かって比較的緩く傾斜する丘陵地帯になっていて、それを刻むように、幾条もの中小河川が、馬渕川に向かって直線的に、あるいは複雑に屈曲しながら流れ下っている。

遺跡の前面にあたる馬渕川の北西側では、高度60~100m以上の丘陵地(おおむね天狗岱段丘面)から、沿岸の沖積地やより低位の洪積段丘面に向かって、落差の大きい急崖を落とすところが多い。

遺跡周辺地域の丘陵・段丘群は、従来、中川、大池、松山などによる八戸付近の区分にしたがって、高位から低位に、蒼前平段丘、天狗岱段丘、高館段丘、根城段丘、田面木段丘、尻内段丘、名久井段丘などに区分されてきたが、最近、大和伸友は第1表に示したように区分している(1988)。第4図は、遺跡を中心においた東西5km、南北3.5kmの範囲を、中川、大池、松山などの区分を基本にしながら、一部を大和の区分に従って変更補足し、作成した地形区分図である。

蒼前平段丘は、小橋の南方にみられる面高度130m以上の起伏に富む丘陵地である。

天狗岱段丘は、この地域に分布するすべての褐色火山灰(ローム)層をのせる段丘で、段丘面高度が80~110mの起伏に富む丘陵を形成している。なだらかに起伏する南方の境渡や杉沢付近の丘陵地、苦米地北方の天魔平から高岩北方へかけての丘陵地が該当する。

あかね段丘(大和、1988)は、遺跡の南西方1~2km付近に造成された住宅団地の新地名に由來した名称で、北に緩やかに傾く高度70~90mのあかね南部を標式地としている。この段丘は南側の天狗岱段丘の裾に沿って、おもに遺跡の南から西南西方向に幅を広げながら続き、あかね、福田付近で広がりが大きくなる。天狗岱段丘との間には、比較的明瞭な落差10~20m前後の段丘崖が連続するところが多い。

高館段丘は、高館火山灰層とその上位の火山灰層をのせる段丘で、この地域での面高度は40~60mである。あかね段丘との間に明瞭な段丘崖をもつ部分は少なく、その段丘面はあかね段丘面から漸移

的に移行して、あかね段丘面と同様に、馬渕川の流路方向に向かって緩やかに傾斜するところが多い。

田面木段丘は、高館火山灰層の上半以上の火山灰層をのせる（大和、1988）段丘である。面高度は20～40mで、高館段丘の外縁に沿って分布する。本来、中川、大池、松山などが田面木段丘と呼んだものは、高館火山灰層の最上部と八戸火山灰層以上で構成される段丘であるが、ここでは大和の区分にしたがうことにした。

名久井段丘は沖積地を構成する上位の段丘で、一般に小河川に沿うものを除いて傾斜はごく小さく、ほぼ水平な平坦面をつくっていることが多い。水分に富む砂礫・砂・シルト・粘土などが段丘構成層で、南部浮石層の分布域ではこの浮石層をのせている。沖積低位面とは落差数～10mの明瞭な段丘崖で接しているところが多い。

名久井段丘を含む沖積低地帯（谷底平野）は、馬渕川両岸にほぼ連続して分布する、ところどころで、丘陵をえぐって弧状に入り込む急崖（段丘崖）と、流路とに囲まれた半月形に広がる盆地状の低地となって広がっている。名川町の馬渕川右岸の広場（地名）の北側や左岸の斗賀の沖積地はその例で、遺跡に近い左岸の古米地付近も同形の開けた沖積地であるが、ここには縄文時代の一時期に湖沼が存在したようである。

遺跡は前述したように、田面木段丘（大和の上野段丘）のごく緩やかな斜面上にあるが、その先端部はやや傾斜を増して、遺跡の発掘部から300m程度で馬渕川に達している。遺跡の西縁は4kmほど南方に谷頭を持つ小谷（段丘面との高度差數m以内）で画される。遺跡東部は浅く凹んだ程度の目立たない小谷で、湿地帯となっている。その東には、遺跡の北東300m付近まで北北西に下り西に向かうもう一つの小谷があり、遺跡の北方で、遺跡東部の浅く凹む小谷と合して馬渕川に達する。遺跡の南東方はゆるやかに高さを増して高館段丘面に漸移し、遺跡の500m先で天狗岱段丘の段丘崖に接する。

## 2 周辺の地質と遺跡の土層

遺跡周辺の基盤は第三紀中新世の安山岩や、安山岩礫を構成砾とする角礫凝灰岩などの堆積岩類である。安山岩は、東方の新井田川沿いや南西方の名川町平に流れ下る如来堂川上流域の先第三系堆積岩類とともに、縄文時代の礫石器や炉跡を埋む炉石、石組みなどによく用いられている。遺跡西縁の谷壁には、第三紀の凝灰岩が露出している。

基盤の上には、砂礫・砂・シルト・粘土層などの段丘堆積物がのり、これらを褐色火山灰層とその上の黒色土層群が覆っている。

発掘地の土層は、最下位の八戸火山灰層まで、上から下へ、I層からX層までの10層に区分された第5図は、各上層の厚さなどが平均的な状態で観察されたA K-45グリッドの北壁の断面である。

I層は厚さ15～45cmの黒褐色（10YR3/2～2/2）土層で、ほぼ全域に分布している。粒径2～10mmの堅い灰白色（10YR8/1～8/2）浮石が散らばり、やや砂質である。堅い浮石は、弥生時代初頭頃に降下堆積したとみられる十和田b降下火山灰層の浮石が、土層中に散乱したものである。

II層は厚さ10～50cmの黒色（10YR1.7～2/1）土層で、一部は黒褐色（10YR3/1）土層となっている。I層と同様の堅い灰白色浮石が散らばるほか、微細な斑点状の白色鉱物粒が全体にかなり含まれ太陽光のもとで目立つ存在である。微細な白色斑の混入は、県内の縄文時代から奈良・平安期までの土層

の特徴である。この土層の一部には、下位に含まれる中揮浮石起源の浮石砂が混入して、砂質土になっている。

III層は厚さ8~42cmの黒色(10YR2/1)土層ないしは黒褐色(10YR2/3)土層で、下方はしだいに中揮浮石起源の浮石砂を密に含んで暗褐色の砂質土となり、下半部は、ところどころで浮石砂が密集した塊状の崩れやすい黄色火山灰層を断続的に残している。そのほか、粒径3~12mmのにぶい黄橙色(10YR7/3)浮石や明黄褐色(10YR7/6)浮石が全体に散らばっている。黄色火山灰層は中揮浮石層で、南郷村畑内通跡では直上に円筒下層a式土器が密集して出土する包含層があり、岩手県中曾根遺跡では大木1式相当土器や大木2式土器をともなう遺構(竪穴住居跡など)を覆っていることが明らかにされている。

IV層は厚さ8~30cmの黒色(10YR2/1)~黒褐色(10YR2/2)土層で、上半部に中揮浮石層起源の浮石砂が混入している。中・下半部には粒径2~15mmの明黄褐色(10YR7/6)浮石がところによってまばらに、ところによってかなり多量に含まれている。

V層は厚さ6~35cmの黒褐色(10YR2/1~2, 3/2)土層で、IV層中の浮石と同様の粒径2~15mm(最大20mm)の明黄褐色(10YR7/6)浮石が、ところによってまばらに、ところによって密に、ところによっては密集塊となって含まれている。この浮石はVI層中の南部浮石層からもたらされたものである。

VI層は厚さ最大30cmで、黒褐色(10YR3/2)ないし暗褐色(10YR3/3)、あるいは褐色(10YR4/4)の土塊が混合した土層で、ところによって尖滅している。層中には粒径3~20mmの浅黄橙色(10YR8/4)浮石が密集あるいは塊状の浮石層として断続的に含まれるが、これは南部浮石層にあたり、年代について $8600 \pm 250$ 年B.P.という測定例(1970、大池ら)がある。

VII層は、色調が上から下へ、暗褐色(10YR3/3)から褐色(10YR4/3)ないしにぶい黄褐色(10YR4/3)へと変化する厚さ15~30cmの土層で、粒径3~20mmの(10YR8/6)浮石が散らばり、また中粒~粗粒砂大の浮石砂が下方ほど多量に混入している。VII層は下位の八戸火山灰との漸移層にあたる。地表からVII層下底までの土層の厚さは90~185cmである。

VIII層からX層までは八戸火山灰層である。VIII層は厚さが16~42cmの黄褐色(10YR5/6)砂質火山灰層で、やや堅い粒径数10mm以上の浮石が含まれる。IX層は厚さ10~25cmの明黄褐色(10YR7/6)浮石層で、粒径数mmから數cmの浮石が密集していて崩れやすい。X層は厚さ15cm以上の浅黄橙色(10YR8/4)火山灰層である。八戸火山灰層の下部は火山灰と粗粒浮石の互層で、下から上へ、[I層]から[VII層]までの6層に分層されている。奇数記号を付した部分は火山灰層に、偶数部は粗粒浮石層にあたる。遺跡層序のVII層は八戸火山灰層の[V層]に、IX層は[VII層]に、X層は[I層]に相当し、八戸火山灰層の[II、III、VI層]は、遺跡では確認できなかった。八戸火山灰層の噴出時期は、12000~13000年前である。

#### [引用・参考文献]

中川久夫 1972: 青森県の第四系 青森県の地質 青森県

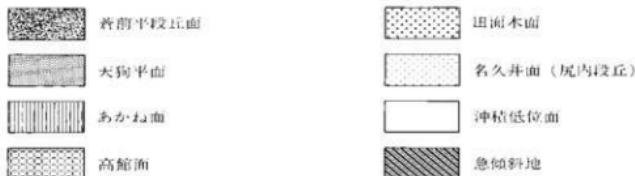
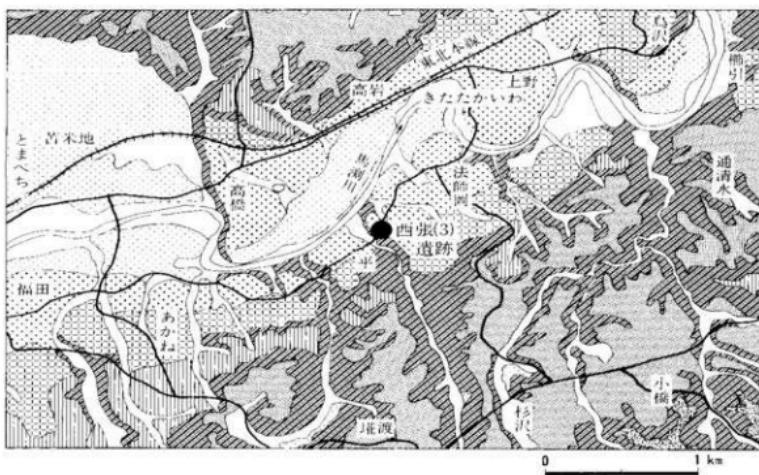
大池昭二・高橋一 1970: 南部浮石の $^{14}\text{C}$ 年代—日本の第四紀層の $^{14}\text{C}$ 年代(62)— 地球科学24

大和伸友 1988: 馬鹿川下流域の段丘地形 胜沼地理24

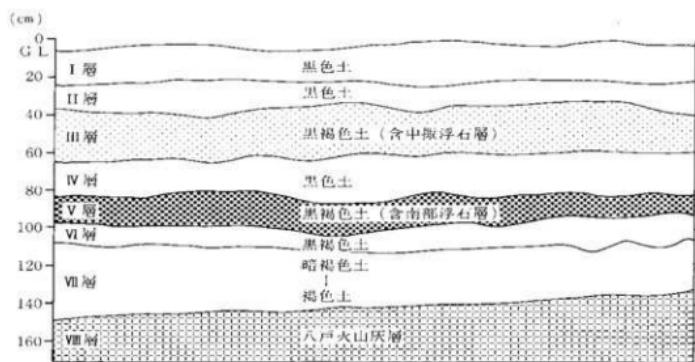
第1表 馬淵川下流域の段丘区分表

中川(1972)	中川・大池・松山	大和伸友(1988)	
洪積世	最高位段丘	着前平・九戸段丘	九戸段丘
	高位段丘	天狗岱段丘	出会い坂段丘面
			杉沢段丘面
			通清水段丘面
			荒猪沢段丘面
	中位段丘	高館段丘	天狗岱低位面
			あかね段丘面
			鳥沢段丘面
	低位段丘	根城段丘	根城段丘面
		長七谷地段丘	上野段丘面
		田面木段丘	五日市段丘面
			三本木段丘面
沖積平野	名久井段丘	名久井段丘面	
		尻内段丘面	尻内段丘面
		海岸・河岸平野	低位面

※ 中川・大池・松山は、それぞれの著作と其著作物を松山が編集



第4図 地形区分図



第5図 標準土層

## 第2節 周辺の遺跡

本遺跡の所在する三戸郡福地村は、県南に位置して、八戸市、五戸町、名川町、南郷村と境界を接している。村の中央を蛇行する馬瀬川は、岩手県北の山地に水源をもち、名川町、福地村、八戸市を南西から北東に貫流して太平洋に達している。

周辺の遺跡の範囲について、特に定義はないと思うが、今、便宜的に本遺跡を中心として半径5キロメートルの円を描くと福地村はその円の中にすっぽりと収まる（第6図）。ここではこの円内にある遺跡を周辺の遺跡として概観してみたい。

平成4年3月に県教育委員会から刊行された『青森県遺跡地図』と保管されている遺跡台帳によると、福地村管内の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）は、35箇所登録されている（第2表）。そして、半径5キロメートルの円内には約120箇所の遺跡が記録されている。まず福地村管内の様子をみてみることにする。

旧石器時代と縄文時代草創期の遺物が発見された遺跡は未だ知られていない。縄文時代早期の遺跡は6箇所、前期は7箇所発見されている。中期は6箇所で早・前期と大差はないが、後期の遺跡は2箇所に急増している。晩期の遺跡は今のところ8箇所確認されている。弥生時代の遺跡・遺物の発掘・発見された遺跡は西山遺跡と西張（3）遺跡である。古墳へ奈良時代の遺物は源次郎（2）遺跡から発見されているが遺跡自体は破壊され消滅した恐れがある。平安時代の遺物は12箇所の遺跡で確認されている。また、中世（7箇所）と近世（2箇所）は館跡として登録されている。館跡の時代は、青森県の中世城館の調査の際のもので、発掘調査によって得られた年代ではないようである。

次に、周辺の遺跡で本格的な発掘調査が行われた遺跡について触れておきたい。

昭和56年9月7日から同年10月24日まで、福地村星巻沢遺跡で最初の発掘調査が行われた。東北縦貫自動車道建設予定地内を県教育委員会（県埋蔵文化財調査センター）が5,300平方メートル調査したもので、溝状ピット（陥とし穴）8基、土坑2基、フラスコ状ピット1基、円形周溝2基（今日では奈良・平安期の古墳とみられている）、早期中葉の貝殻文土器、中期末～後期初頭の土器及び石器、平安時代の土師器、須恵器などが出土した。量的には円筒土器片が多い（県埋文報第83集）。

昭和62年7月1日から同年10月31日まで、福地村館野遺跡を3,000平方メートル発掘調査した。天魔平地区農道整備事業に伴うものである。縄文後期（十腰内I式）の竪穴住居跡1軒、前期・中期（円筒下層d1式～円筒上層c式）の土坑（フラスコ状ピット、土坑墓を含む）58基、屋外炉5基、焼土遺構11基、溝状ピット2基、縄文前期・中期・後期の土器、石器（石鎚、石槍、石錐、石箇、石匙、不定形石器、磨製石斧、石錘、半円状扁平打製石器、抉入扁平磨製石器、北海道式石冠、擦石、凹石、敲き石、砥石、石皿、台石など）、土製品（土偶、錘形土製品、土器片再利用円盤）、石製品（石刀、有孔石製品、石棒、玦状耳飾）が出土した。玦状耳飾は、土坑墓から発掘された貴重な資料で、また、円筒土器を主体とした遺物は段ボール箱で160箱出土した（県埋文報第119集）。

平成元年7月3日から同年10月20日まで、福地村雷遺跡と西山遺跡をそれぞれ1,400平方メートルと1,500平方メートル調査された。これも天魔平地区農道整備事業に伴う調査である。

雷遺跡では、溝状ピット3基と縄文土器、平安時代の土師器、須恵器片が段ボール箱で5箱程出土した。縄文土器の大部分は、中期の円筒上層d式、同e式で占められているが、早期・前期・後期の

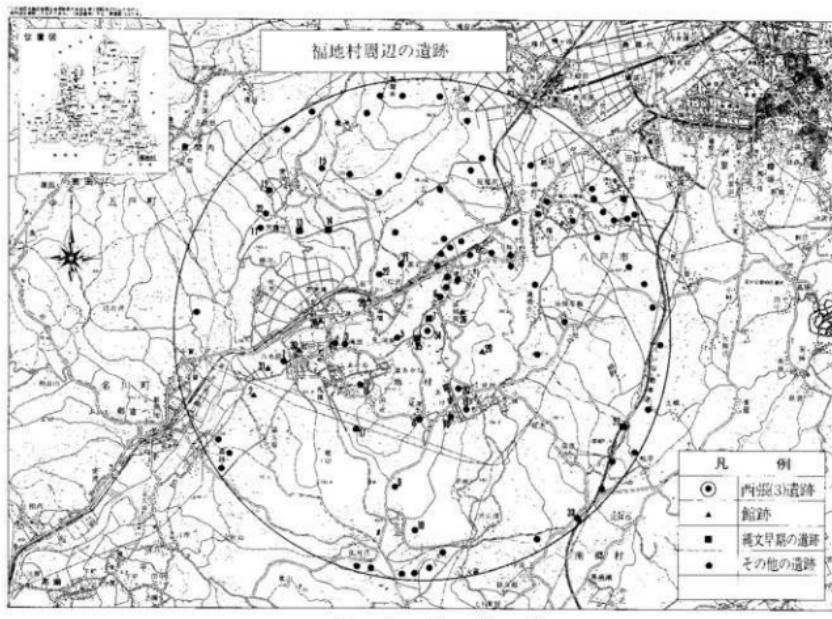
土器も数点ずつではあるが出ている。

西山遺跡では、縄文時代晩期末葉とみられる堅穴住居跡3軒、縄文時代でも時期を特定できない堅穴住居跡2軒、同じく土坑6基、溝状ピット9基、焼土遺構4基が検出された。この遺跡の主体をなす土器は、縄文時代後期前半と弥生時代中期・奈良時代式土器である。そのほかに縄文時代早期・前期・中期の土器が、数片ではあるが認められている。また、晚期の土器も量的に少ないが出ている。縄文後期の土器は、十腰内I式よりも古いものがまとまって、また、十腰内II式に比定されるものが数点ある。これらの土器の中で特筆されるものの一つとして狩猟文土器が挙げられる。器形は壺形であるが文様の展開は把握されていない。このなかの1片に粘土の貼り付けによる鹿のモチーフが認められている。当該時期の狩猟対象に鹿が存在していたことの証左になるものである（県埋文報第136集）。

東北新幹線盛岡以北の工事に伴う発掘調査では、三戸郡名川町日渡遺跡を挙げることができる。

日渡遺跡の調査は、平成5年4月12日から同年6月25日まで3,144平方メートルにわたって実施された。検出された遺構は、底面に逆茂木の跡がある土坑2基だけである。この土坑は形態、規模、堆積土などから縄文時代早期中葉の陥とし穴と判断された。また、出土した土師器片は、客土中からのものであった（県埋文報第162集）。

（北林八洲晴）



第6図 周辺の遺跡

第2表 福地村遺跡一覧表

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	旧石器時代					種別	文献		
				縄文	古墳	奈良	平安	中世				
				草 創 期	中期	後 期	生	墳	良	安	世	
1	64001	西久根	福田字西久根		○○						散布地	福地村郷土誌
2	64002	矢崎館	福田字矢崎館			○		○			館跡	青森県の中世城館
3	64003	源次郎(1)	福田字源氏郎平			○					散布地	
4	64004	源次郎(2)	福田字源氏郎平				○○				散布地	
5	64005	館(平館)	塙渡字館		○○			○			館跡	青森県の中世城館
6	64006	西張(1)	法師岡字西張		○○○			○			散布地	
7	64007	西張(2)	法師岡字西張	○	○○						散布地	
8	64008	塙渡	塙渡字塙渡			○○					散布地	八戸周辺の遺跡地名表
9	64009	佐伝塙	塙渡字佐伝塙			○					散布地	
10	64010	長地嶺	塙渡字長地嶺			○					散布地	
11	64011	館野	苦米地字館野		○○○						集落跡	県埋文報第119集
12	64012	北向	麦沢字北向			○					散布地	
13	64013	當	苦米地字當		○○○○			○			集落跡	県埋文報第136集
14	64014	西山	苦米地字西山		○○○○○○○			○			集落跡	県埋文報第136集
15	64015	下木戸場	麦沢字下木戸場	○							散布地	
16	64016	カツテウ	塙渡字カツテウ		○○○						散布地	
17	64017	放森	塙渡字放森		○○○			○			散布地	
18	64018	牛墓	杉沢字牛墓			○		○			散布地	
19	64019	漆山	杉沢字漆山				○				散布地	
20	64020	天獅子	杉沢字天獅子	○		○					散布地	八戸周辺の遺跡地名表
21	64021	小松沢下平	小泉字小松沢下平		○						散布地	
22	64022	中森	小泉字中森		○○○			○			散布地	
23	64023	巖倉平	小泉字巖倉平			○		○			散布地	
24	64024	細尻	小泉字細尻				○				散布地	
25	64025	高橋館	高橋字横館				○○				館跡	青森県の中世城館
26	64026	法師岡館	法師岡字田向		○		○○				館跡	青森県の中世城館
27	64027	豊巻沢	杣木字豊巻沢	○	○○○						散布地	県埋文報第83集
28	64028	苦米地館	苦米地字神明下河原				○				館跡	青森県の中世城館
29	64029	柳原塙	杉沢字館				○				館跡	青森県の中世城館
30	64030	福田館	福田字館				○				館跡	青森県の中世城館
31	64031	福田古館	福田字古館				○				館跡	青森県の中世城館
32	64032	清水頭	麦沢字清水頭			○					散布地	
33	64033	境久保	杣木字陣場		○						散布地	
34	64034	西張(3)	法師岡字大道下	○	○			○			集落跡、館跡	平成6、7年発掘
35	64035	石焼沢	法師岡字石焼沢	○○	○○○						散布地	平成7年発掘

(注) 表中の、旧石・旧石器時代、草・草創期、早~晩期~晩期を省略してある。

## 第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 繩文時代の遺構

本遺跡で検出された繩文時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、配石遺構1基、土坑3基、溝状ピット3基である。以下にその概要を記載する。

#### (1) 竪穴住居跡

##### 第1号竪穴住居跡（第7図）

【位置と確認】 A O・A P-40グリッドに位置し、第VI層上面で楕円形の落ち込みを確認した。

【重複】 認められなかった。

【平面形・規模】 平面形は、長軸4.0m×短軸3.1mのほぼ楕円形を呈しており、床面積は、6.67m<sup>2</sup>の規模である。

【壁・床面】 床面は、中央がやや深んだ鍋底状になっており、壁は、床面から緩やかに立ち上がりっている。確認面からの深さは、40cmほどである。

【柱穴】 明確に柱穴といえるピットは検出できなかつたが、東西方向にあたる住居跡の壁の外側に、直径40~60cm、深さ20cmほどのピットが検出された。

【炉】 検出されなかつた。

【堆積土】 堆積土は、10層に分層され、黒褐色土を主体としている。層全体にゴロタ（南部浮石）が混入している。

【出土遺物】 床面及び堆積土中からは、遺物は出土しなかつた。

【小結】 遺物は出土しなかつたが、形態から竪穴住居跡とした。構築時期を決定する遺物はないが、堆積土及び遺構周辺から出土している遺物から、繩文時代早期と思われる。

#### (2) 配石遺構

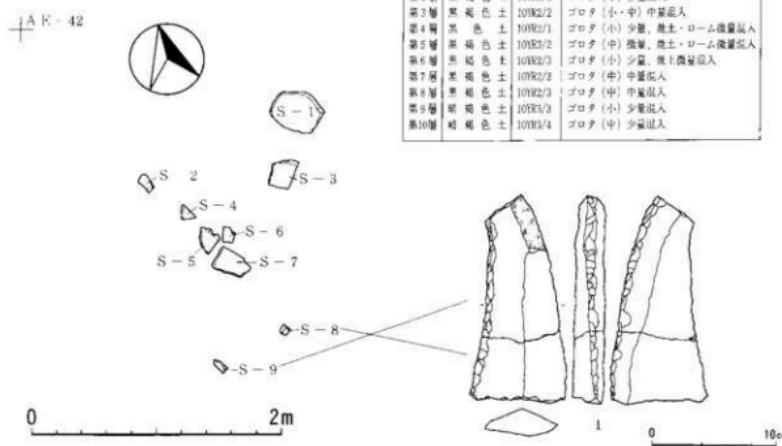
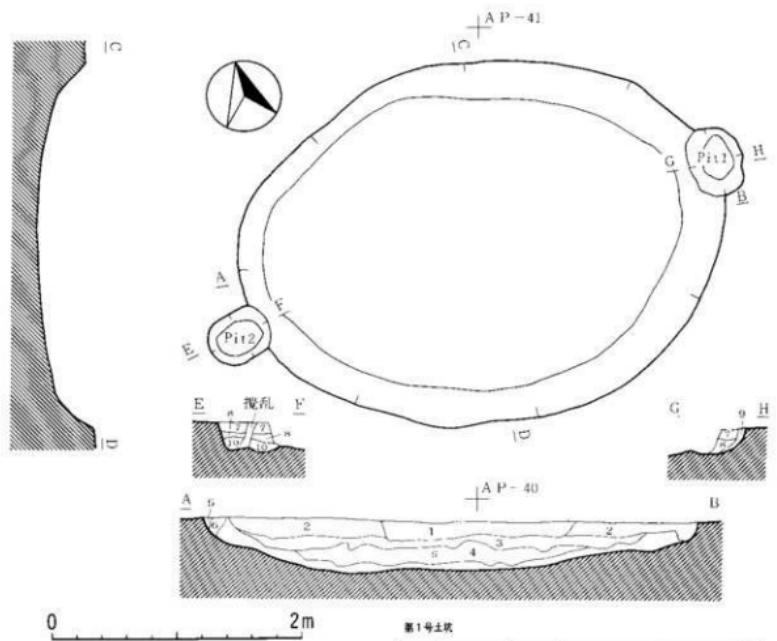
##### 第1号配石遺構（第7図）

【位置と確認】 調査区域の南西の端、A E-41グリッドに位置し、第V層検査中に検出した。

【範囲】 東西約1.5m、南北1.6mの範囲に安山岩の礫がV字状配されて検出された。礫は7個で、その形は四角い扁平なものが多く、大きさが30cm以上、重さ10kgを超えるものもある。割れている礫が数個あり、それらは接合することができた。これらの礫は、明確な使用痕は認められないが、形態から台石として使用された可能性もある。

【出土遺物】 配石遺構の南から、用途不明の石製品が出土している。（第7図1）この石製品は、扁平な板状の石の両端を、剣状に片側から加工している。欠損しているが残存部の大きさは、長さ9cm、幅4cm、厚さ1.3cm、重さ343gほどである。石質は、流紋岩製である。

【小結】 本遺構の周辺からは、繩文時代早期の土器片が出土しており、本遺構も繩文時代早期につくられたものと思われる。その用途ははっきりしないが、礫を台石として使用した作業場の可能性が考えられる。



第1号土坑	
第1層	黒褐色土 10YR2/2 ゴロタ(大) 多量混入
第2層	黒褐色土 10YR2/3 ゴロタ(中) 多量混入
第3層	黒褐色土 10YR2/2 プロタ(小・中) 中量混入
第4層	灰褐色土 10YR2/1 ゴロタ(小) 少量、他土・ローム微量混入
第5層	灰褐色土 10YR3/2 プロタ(中) 微量、他土・ローム微量混入
第6層	灰褐色土 10YR2/3 ゴロタ(小) 少量、他土微量混入
第7層	黒褐色土 10YR2/2 ゴロタ(中) 中量混入
第8層	黒褐色土 10YR2/3 プロタ(中) 中量混入
第9層	黒褐色土 10YR3/3 ゴロタ(小) 少量混入
第10層	暗褐色土 10YR3/4 ゴロタ(中) 少量混入

第7図 積穴住居跡・配石遺構

### (3) 土 坑

#### 第1号土坑（第8図）

【位置と確認】 AM-37グリッドに位置し、第VI層上面で円形の落ち込みを確認した。

【重複】 認められなかった。

【平面形・規模】 平面形は、直径約1.5mのほぼ円形を呈しており、底面は、中央がやや窪んだ鍋底状になっている。壁は底面から緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは、20cmほどである。

【堆積土】 堆積土は、3層に分層され、暗褐色土を主体としている。層全体にゴロタ（南部浮石）が混入している。

【出土遺物】 遺物は、出土しなかった。

【小結】 平面形が円形を呈していたため、土坑としたが、遺物が出土せず、掘り方も浅いため自然にできた落ち込みの可能性もある。

#### 第2号土坑（第8図）

【位置と確認】 AN-41グリッドに位置し、第VI層上面で楕円形の落ち込みを確認した。

【重複】 認められなかった。

【平面形・規模】 平面形は、長軸2.5m×短軸1.8mのほぼ楕円形を呈しており、底面は、中央がやや窪んだ鍋底状になっている。壁は底面から緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは、25cmほどである。

【堆積土】 堆積土は、5層に分層され、黒褐色土を主体としている。層全体にゴロタ（南部浮石）が混入している。

【出土遺物】 遺物は、出土しなかった。

【小結】 平面形が楕円形を呈していたため、土坑としたが、遺物が出土せず、掘り方も浅いため自然にできた落ち込みの可能性もある。

#### 第3号土坑（第8図）

【位置と確認】 AM-45グリッドに位置し、第VI層上面で円形の落ち込みを確認した。

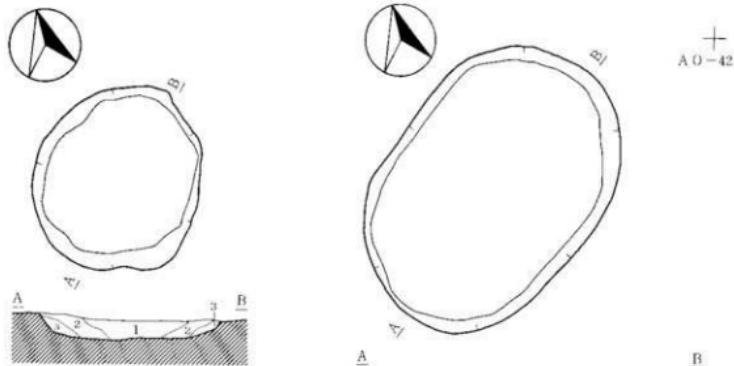
【重複】 認められなかった。

【平面形・規模】 平面形は、長軸1.9m×短軸1.5mのほぼ楕円形を呈しており、底面は、ほぼ平らである。底面の中央付近には、逆茂木の跡と思われるビットが4個検出された。ビットは直径5~10cm、深さ20~40cmで、ほぼ垂直に検出された。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、口徑部でわずかに外側にひらいている。確認面からの深さは、1.1mほどである。

【堆積土】 堆積土は、7層に分層され、黒褐色土を主体としている。層全体にゴロタ（南部浮石）が混入している。

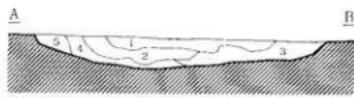
【出土遺物】 遺物は、出土しなかった。

【小結】 本土坑は、形態及び堆積土の様子から繩文時代早期の逆茂木をもつ陥とし穴と推定される。



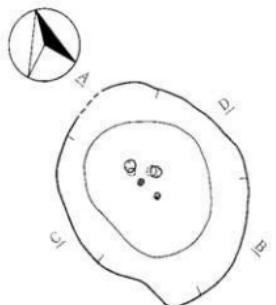
第1号土坑

第1層	褐 褐 色 土	上	10TR3/3	ゴロタ(少)・地土微量、ローム少量混入
第2層	褐 褐 色 土	10TR3/3	ゴロタ(中)・地土微量、ローム微量混入	
第3層	褐 褐 色 土	10TR3/4	ゴロタ(少)・地土微量、ローム中量混入	

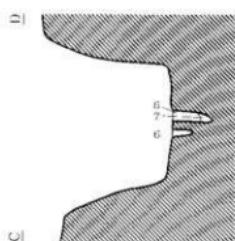
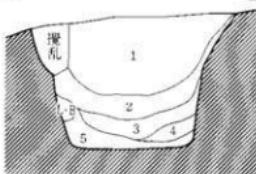


第2号土坑

第1層	褐 褐 色 土	10TR2/3	ゴロタ(中) 中量、地土微量混入
第2層	褐 褐 色 土	10TR2/3	ゴロタ(中) 少量、地土微量混入
第3層	褐 褐 色 土	10TR3/3	ゴロタ(中) 少量、地土微量混入
第4層	褐 褐 色 土	10TR3/2	ゴロタ(少)・地土微量混入
第5層	褐 褐 色 土	10TR3/3	ゴロタ(中) 中量混入



△ A B △



第3号土坑

第1層	黑 色 土	上	10TR1.7/1	ゴロタ(中) 多量、黑色土中量混入
第2層	黑 色 土	10TR2/3	ゴロタ(少) 中量、黑色土中量混入	
第3層	褐 褐 色 土	10TR3/4	ゴロタ(少) 微量	
第4層	黑 褐 色 土	10TR2/2	ゴロタ(少) 搪塞混入	
第5層	黑 褐 色 土	10TR2/2	ゴロタ(少) 多量、ローム少量混入	
第6層	黑 褐 色 土	10TR3/1	ゴロタ(少) 多量、ローム少量混入	
第7層	褐 褐 色 土	10TR3/3	ゴロタ混入	

0 2m

第8図 土 坑

#### (4) 溝状ピット

##### 第1号溝状ピット（第9図）

【位置と確認】 A R - 72グリッドに位置し、第1・2号溝状遺構精査中に確認した。

【重複】 第1・2号溝状遺構と重複しており、本遺構の方が、溝状遺構より古い。

【平面形・規模】 平面形は、長軸3.3m×短軸1.1mのほぼ楕円形を呈しており、底面は、わずかに起伏がみられるがほぼ平らである。壁は、底面からほぼ直線的に立ち上がり、開口部付近で外側に開いているが、北側の壁は、袋状になっている。確認面からの深さは、1.0mほどである。

【堆積土】 堆積土は、4層に分層され、黒色土を主体としている。

【出土遺物】 遺物は、出土しなかった。

##### 第2号溝状ピット（第9図）

【位置と確認】 A H・A I - 70グリッドに位置し、第III層上面で黑色土の落ち込みを確認した。

【重複】 認められなかった。

【平面形・規模】 平面形は、長軸3.9m×短軸0.8mのほぼ楕円形を呈しており、底面は、わずかに起伏がみられるがほぼ平らである。壁は、底面からほぼ直線的に立ち上がり、開口部付近で外側に開いている。確認面からの深さは、1.0mほどである。

【堆積土】 堆積土は、7層に分層され、黒褐色土を主体としている。

【出土遺物】 遺物は、出土しなかった。

##### 第3号溝状ピット（第9図）

【位置と確認】 A R - 42グリッドに位置し、第III層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

【重複】 認められなかった。

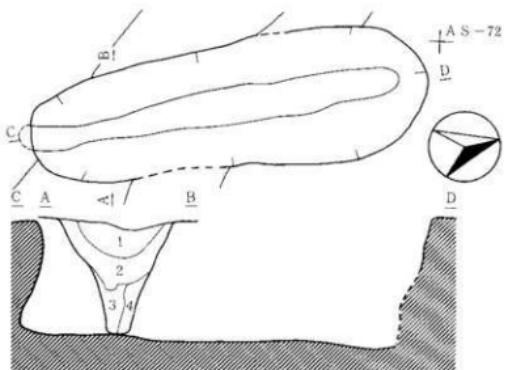
【平面形・規模】 平面形は、長軸3.6m×短軸0.5mのほぼ楕円形を呈しており、底面は、わずかに起伏がみられるがほぼ平らである。壁は、底面からほぼ直線的に立ち上がり、開口部付近で外側に開いている。確認面からの深さは、0.8mほどである。

【堆積土】 堆積土は、7層に分層され、黒褐色土を主体としている。

【出土遺物】 遺物は、出土しなかった。

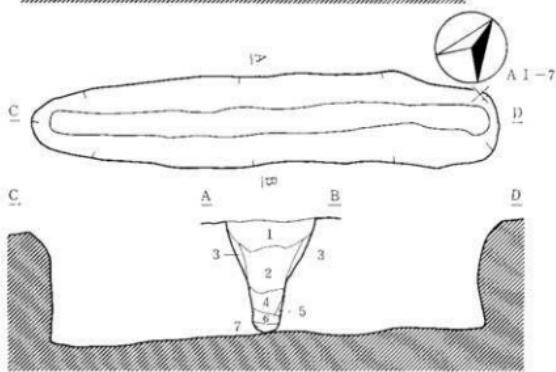
【小結】 溝状ピットの底面及び堆積土中からは遺物が出土していないので、それらの構築時期は明確でないが、遺構はすべて第III層（中盤浮石層混入）上面で確認されている。したがって、これまでの出土例と同様に、縄文時代中期～後期に構築されたものと思われる。

（下山 信昭）



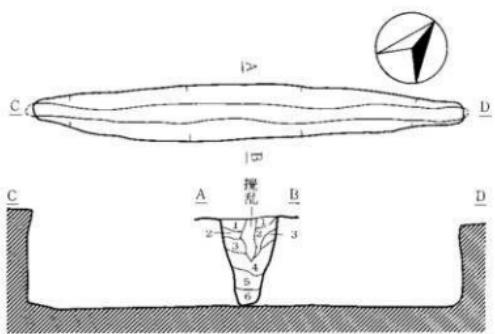
第1号溝状ピット

第1層	黒色土	10R2/1
ゴロタ(中)	砂質土・コーム微量混入	
第2層	黑色土	10R2/1
ゴロタ(中)	ローム少量、砂質+中量混入	
第3層	黒褐色土	10R2/3
ゴロタ(中)	微量混入	
第4層	褐色土	10R4/4



第2号溝状ピット

第1層	黒色土	10R2/1
ゴロタ(小)	微量混入	
第2層	黒色土	10R3.1/1
ゴロタ(中)	少量混入	
第3層	黒褐色土	10R3/1
ゴロタ(大)	中量混入	
第4層	黒褐色土	10R3/1
ゴロタ(中)	微量混入	
第5層	黒褐色土	10R3/2
ローム中量混入		
第6層	黒褐色土	10R2/2
ゴロタ(小)	少量混入	
第7層	黒褐色土	10R3/1
ローム少量混入		



第3号溝状ピット

第1層	褐色土	10R3/4
ゴロタ(小)	少量混入	
第2層	黒褐色土	10R2/2
ゴロタ(中)	微量混入	
第3層	褐色土	10R4/4
ゴロタ(小)	微量混入	
第4層	褐色土	10R4/6
ローム層、ゴロタ(中)	微量混入	
第5層	黒褐色土	10R5/6
ローム層		
第6層	黒褐色土	10R3/2
ローム少量混入		

0 2m

第9図 溝状ピット

## 第2節 繩文時代以外の遺構

本遺跡で検出された縄文時代以外の遺構は、濠跡1条、溝状遺構6条である。これらの遺構は構築年代を決定づける遺物が遺構内から出土していないが、堆積土及び確認された土層から縄文時代よりも新しい遺構であると判断したものである。以下にそれらの概要を記述する。

### (1) 濠 跡

#### 第1号濠跡 (第11図)

【位置と確認】 調査区域の南端にあたるAM-36・AN-36・37グリッドに位置し、第II層粗掘中に確認された。

【重複】 記載されなかった。

【形態】 一部しか検出されず、濠跡の全体を確認することはできなかったが、断面形はV字状を呈するものとおもわれる。濠跡の幅は推定3mほどで、確認面からの深さは1.9mである。

【堆積土】 堆積土は、10層に分層され、黒色土を主体としている。底面には、砂が堆積している。

【出土遺物】 堆積土中から、縄文土器片が数点出土した。

【小結】 一部のみの調査で遺構内から良好な遺物等が出土しなかったので、構築時期ははっきりしないが、濠跡の形状及び堆積土から、古代以降に構築された可能性が高い。

### (2) 溝 状 遺 構

本遺跡で検出された遺構を溝状遺構としたのは、通常の溝跡とは異なり、溝跡に沿ってピット群が多数検出されたためである(第1・5号溝状遺構)。従って、本遺跡で検出された溝状遺構は、棚列等を伴う可能性がある。

#### 第1号溝状遺構 (第12図)

【位置と確認】 AL-76～AU-70グリッドに位置し、第II層粗掘中に確認された。

【重複】 第2号溝状遺構及び第1号溝状ピットと重複し、第1号溝状ピットよりは新しく、第2号溝状遺構よりは古い。

【平面形・規模】 南東から北西方向へほぼ直線的にのびており、幅0.7mで長さ48mほどが検出された。溝に沿って多数のピットが検出された。ピットは、直径30～50cm、深さは30～50cmほどである。

【壁・底面】 底面は平坦で、壁は、底面からほぼ直線的に斜めに立ち上がっている。確認面からの深さは、50cmほどである。

【堆積土】 堆積土は、3層に分層され、黒色土を主体としている。

【出土遺物】 堆積土中から、縄文土器片が数点出土した。

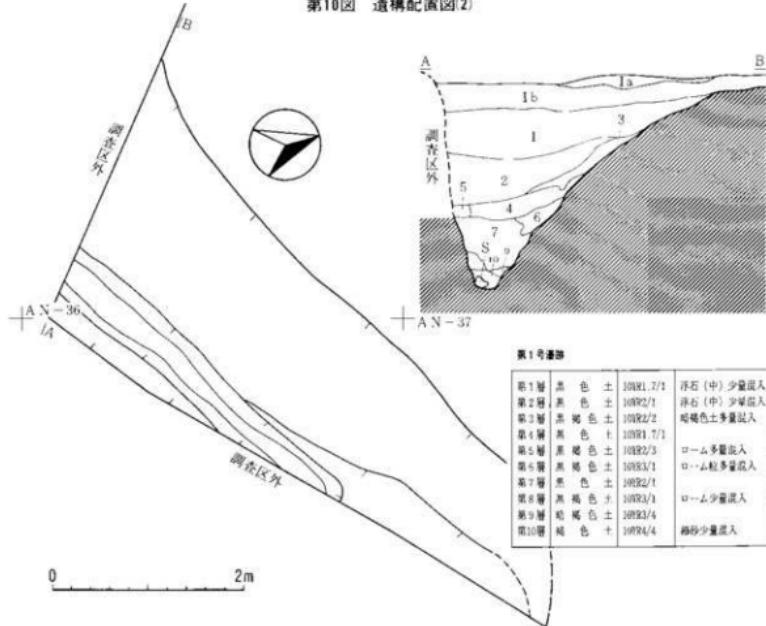
#### 第2号溝状遺構 (第12図)

【位置と確認】 AL-76～AU-70グリッドに位置し、第II層粗掘中に確認された。

【重複】 第1号溝状遺構及び第1号溝状ピットと重複し、それらの遺構より新しい。



第10図 造構配図(2)



第11図 潟 跡

**[平面形・規模]** 南東から北西方向へほぼ直線的にのびており、幅1.2mで長さ48mほどが検出された。

**[壁・底面]** 底面は平坦で、堅くしまっているところが数箇所確認された。壁は、底面からほぼ直線的に斜めに立ち上がっている。確認面からの深さは、30cmほどである。

**[堆積土]** 堆積土は、2層に分層され、黒色土を主体としている。

**[出土遺物]** 遺物は、出土しなかった。

#### 第3号溝状遺構 （第13図）

**[位置と確認]** A K -53～A V -47グリッドに位置し、第II層粗掘中に確認された。

**[重複]** 第5・6号溝状遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。

**[平面形・規模]** 南東から北西方向へほぼ直線的にのびており、幅1.3mで長さ48mほどが検出された。A K -53グリッドで第5・6号溝状遺構と直交し、それから先には検出されなかった。

**[壁・底面]** 底面は鍋底状で、壁は、底面から緩やかに立ち上がっている。確認面からの深さは、40cmほどである。

**[堆積土]** 堆積土は、4層に分層され、黒色土を主体としている。

**[出土遺物]** 遺物は、出土しなかった。

#### 第4号溝状遺構 （第13図）

**[位置と確認]** A E -40～A G -42グリッドに位置し、第II層粗掘中に確認された。

**[重複]** 認められなかった。

**[平面形・規模]** 北東から南西方向へほぼ直線的にのびており、幅0.8mで長さ12mほどが検出された。

**[壁・底面]** 底面は平坦で、壁は、底面からほぼ直線的に立ち上がっている。確認面からの深さは、20cmほどである。

**[堆積土]** 堆積土は、3層に分層され、黒褐色土を主体としている。

**[出土遺物]** 遺物は、出土しなかった。

#### 第5号溝状遺構 （第13図）

**[位置と確認]** A G -49～A K -53グリッドに位置し、第II層粗掘中に確認された。

**[重複]** 第3・6号溝状遺構と重複し新旧関係は不明である。

**[平面形・規模]** 北東から南西方向へほぼ直線的にのびており、幅0.7mで長さ25mほどが検出された。溝に沿って多数のビットが検出された。ビットは、直径20～50cm、深さは20～40cmほどである。

**[壁・底面]** 底面は多少起伏がみられる。壁は、底面からほぼ直線的に立ち上がっている。確認面からの深さは、30cmほどである。

**[堆積土]** 堆積土は、5層に分層され、黒褐色土を主体としている。

**[出土遺物]** 遺物は、出土しなかった。

### 第6号溝状遺構（第13図）

【位置と確認】 AG—49～AK—53グリッドに位置し、第II層粗掘中に確認された。

【重複】 第3・6号溝状遺構と重複し新旧関係は不明である。

【平面形・規模】 北東から南西方向へほぼ直線的にのびており、幅0.7mで長さ25mほどが検出された。

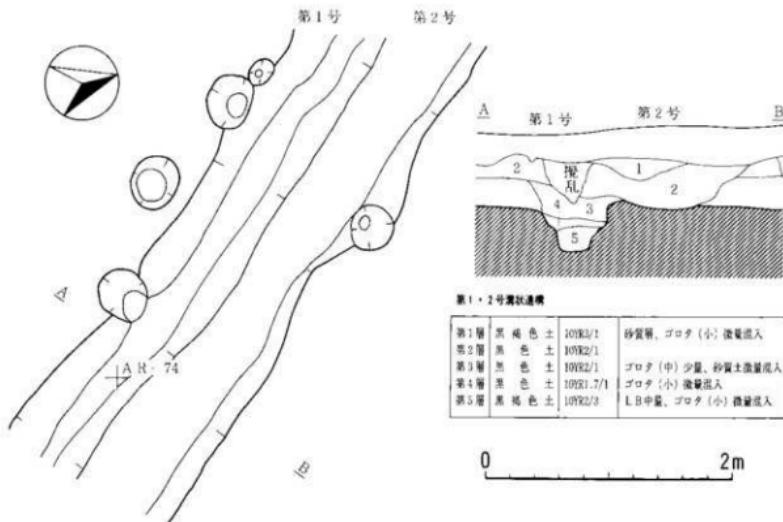
【壁・底面】 底面は平坦で、壁は、底面からほぼ直線的に立ち上がっている。確認面からの深さは、40cmほどである。

【堆積土】 堆積土は、2層に分層され、黒色土を主体としている。

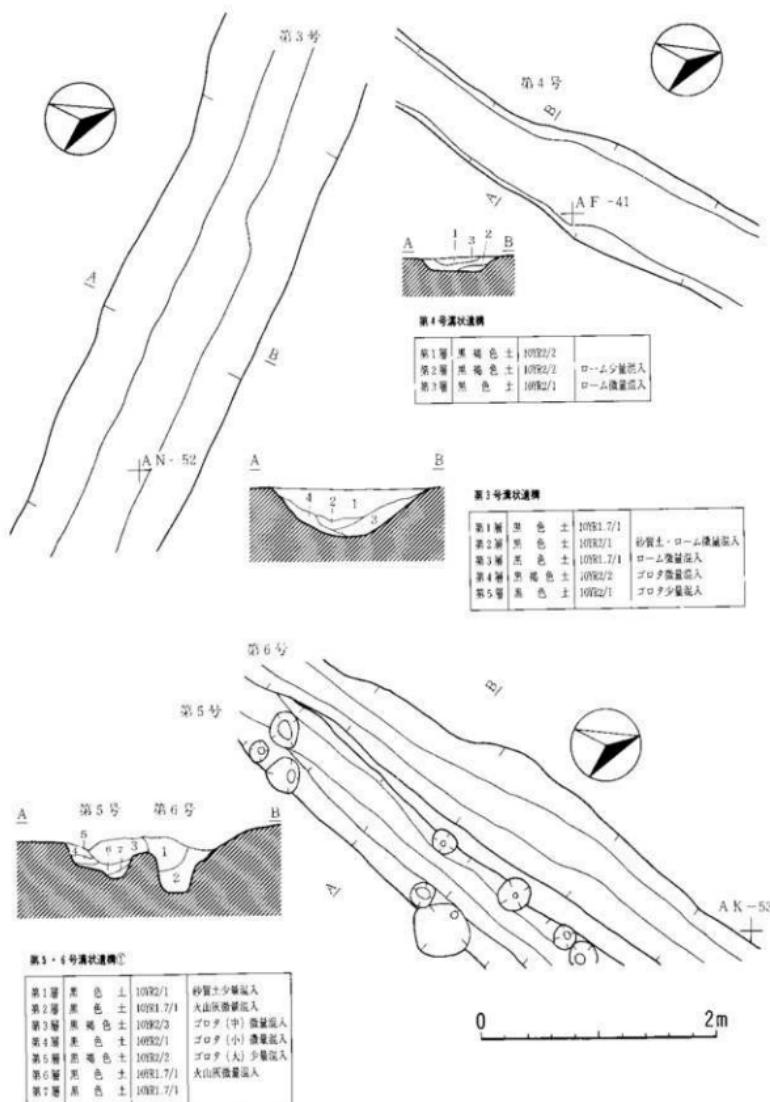
【出土遺物】 遺物は、出土しなかった。

【小結】 本遺跡の溝状遺構は、多数のピットを伴うものが検出されている（第1・5号）ので、単なる排水等のための溝跡とは考えにくい。また、遺構の検出されたところが、現在の地権者の境界付近であることから、土地の境界を意味する溝跡の可能性がある。現在は、周辺は畑地あるいは水田であるが、昔は牧場であったという地元の人の証言もあり、溝に伴うピットは、牧場の柵列の可能性もある。いずれにしても、本遺跡の溝状遺構は、堆積土の様子からも近世以降のものであると思われる。

（下山 信昭）



第12図 溝状遺構(1)



第13図 溝状遺構②

### 第3節 遺構外出土遺物

本遺跡で出土した遺物のほとんどは、遺構外出土のものである。遺物が集中して出土した地域は、南北2箇所に分かれ、調査区の南側（南区）では縄文時代早期の遺物が、調査区北側（北区）では縄文時代後期の遺物がまとまって出土している（第23図）。南区は、なだらかな傾斜地で縄文時代早期の遺物が広範囲に散在して出土している。北区は、農地整備のため地形がだいぶ変化しているが、遺物の集中している場所は、小さな谷地形であったと思われる。

以下にそれぞれの遺物について概要を記述する。

#### (1) 土 器

土器は、縄文時代早期と後期のものがほとんどで、復元できたものはわずかである。土器は時期及び文様により大まかに下記のように群別した。

第I群土器（押型文を施文する土器をまとめた）

第II群上器（押型文以外の縄文時代早期の土器をまとめた）

第III群土器（縄文時代前期の土器をまとめた）

第IV群土器（縄文時代後期の土器をまとめた）

以下に、それぞれの土器についてその特徴を記述する。

##### 第I群土器（第15図1～9）

押型文が施文された土器は、合計9片出土した。同一個体と思われる土器片もあるので、個体数としては、3～4個体あると思われる。全てが胴部破片で、器形のわかるものはない。施文されている文様は、全て重層V字状押型文であり、その他の文様はみられない。原体の長さは、3～5cmほどで、横位に回転施文されている。胎土には、纖維及び浮石の混入がみられる。本群土器は、八戸市日計遺跡から出土している日計式土器に比定される。

##### 第II群土器（第15・16図）

第II群土器は、縄文時代早期の土器群であり、復元できたものは1個体のみでほとんどが破片資料である。施文されている文様から、3つに細分した。

1類：貝殻文を主体とした土器（第15・16図）

貝殻文が主体として施文されている土器は、白浜・小舟渡平式に比定される土器群（10～20、28～40）と根井沼・寺の沢式に比定される土器群（21～27）の二種類に分けられる。白浜・小舟渡平式に比定される土器群の器形は、底部から直線的に開く尖底深鉢形と思われる。胎土には、浮石や砂粒を混入するものが多く、焼成は比較的良好である。内面は、ヘラなどによりナデられているものが多く、貝殻条痕文もみられる。口縁部は平縁で、口唇部にヘラまたは棒状工具による刻目文を有するものが多い。施文文様は、貝殻条痕文+刺突文・貝殻腹縁文+刺突文・貝殻腹縁文+貝殻条痕文+刺突文の3種類の文様構成がみられるが、口縁部（胴部上半）と胴部下半では文様が異なる。胴部下半は、貝殻条痕文または無文（ナデ調整）がほとんどである。根井沼・寺の沢式に比定される土器群は、器形及

び胎土は白浜・小舟渡平式に比定される土器群に似ているが、内面に条痕や明確なナデ跡がみられない。口縁部は平縁で、刻目文がみられる。胴部の施文文様は、貝殻腹縁文+刺突文が底部近くまで施文されている。

#### 2類：繩文を主体とした上器（第16図42～45）

繩文時代早期のものと思われる繩文を主体として文様が施文されている土器が数点出土している。すべて破片資料なので、器形はわからないが、口縁は平縁である。口唇部には刻目文がみられ1類土器と類似する。胎土には、繊維及び浮石の混入がみられる。地文には、L R及びR L繩文が横位に施文されており、2種類の原体で羽状繩文を構成するものもある。口縁部には、4～8条の平行沈線文が施文されている。器厚は、6mm前後と比較的薄手である。類似した文様が施文された土器は、八戸市鶴平(1)遺跡等で日計式土器に共伴する繩文土器としてとらえられており、本遺跡では、日計式押型土器が出土していることからも同時期に比定されると考えられる。

#### 3類：沈線文を主体とした土器（第16図41）

繩文時代早期と思われる沈線文のみを施文した土器が1点出土している。胴部下半がないため器形ははっきりしないが、小型の深鉢形土器と思われる。胎土には、浮石が混入しており、焼成は良好である。口縁は緩い波状を呈すると思われ、口唇部には刻目文が施文されている。胴部の文様は、細い先の尖った棒状工具により、沈線文が方形に6～7重施文されている。胴部下半は無文と思われる。貝殻文系の土器群とともに出土しているので、同時期に比定されると思われる。

### 第三群土器（第16図46～48）

繩文時代前期の土器と思われるものは、数点出土した。いずれも胴部破片で、器形はわからないが、同一個体の可能性もある。胎土には繊維が混入している。文様は、結束羽状繩文が横位に施文されており、早稻田6類あたりに比定される土器と思われる。

### 第四群土器（第17～19図）

第四群土器は、本遺跡で最も出土量が多い土器であるが、ほとんどが破片資料であり、復元できたものは、わずかである。本群の土器は、おおむね十腰内I式に比定される土器群であるが、施文されている文様等から、4つに細分した。

#### 1類：沈線文を主体とする土器（第17・18図49～78）

沈線文を主体とする土器は、IV群土器の中で最も出土量が多く、平行文・円形文・横凹形文・渦巻き文・S字状文・格子状文の沈線文が施文されている。器形は、深鉢形がほとんどである。胎土には、砂粒を混入するものが多々みられ、焼成は良好である。口縁は、波状を呈するものと平縁のものがあり、波状を呈するものには、突起部や刻目文を有するものがある。文様は、2ないし3条の沈線文で直線や曲線を描き施文されているものが多い。文様帶は、胴部上半に限られ、下半にはほとんどみられない。

#### 2類：磨消繩文を主体とする土器（第18図79～85）

磨消繩文を主体とする土器は、1類に比べると数が少ない。破片がほとんどであるが、器形は、深鉢・浅鉢・壺がみられる。1類同様、波状口縁と平縁がみられ、波状口縁には刻目文もみられる。繩

文は、RおよびL R縄文が施文されている。十腰内 I式以降の土器群に比定されると思われる。

#### 3類：縄文を主体とする土器（第19図86～91）

縄文を主体とする土器は、平縁の深鉢形の器形を呈すると思われる。胴部に縄文を施文するものと網目状撚糸文を施文するものがみられる。網目状撚糸文を施文するものは、口縁部に1～2条の沈線文を有する。

#### 4類：その他の土器（第19図92～98）

底部が数点出土している。小型の深鉢のものとみられ、台付土器の底部（台部）とみられる土器が1点出土している。底部の側面及び底面にも沈線文が施文されているものもある。台付の底部は、I字状のすかしが施されており、そのまわりに1～3条の沈線文が施文されている。

### （2）土 製 品

本遺跡から出土した土製品は、円盤状土製品1点、キノコ形土製品1点の合計2点である。2点とも北区から出土している。

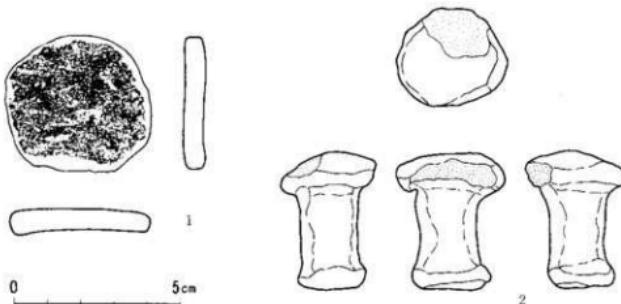
#### 〔円盤状土製品〕（第14図1）

A F-77グリッドの第II層より、縄文時代後期の土器片とともに出土している。縄文時代後期の土器片を利用して円盤状につくっており、直径は4cmほどである。文様は磨消縄文が施文されており、縄文時代後期のものである。

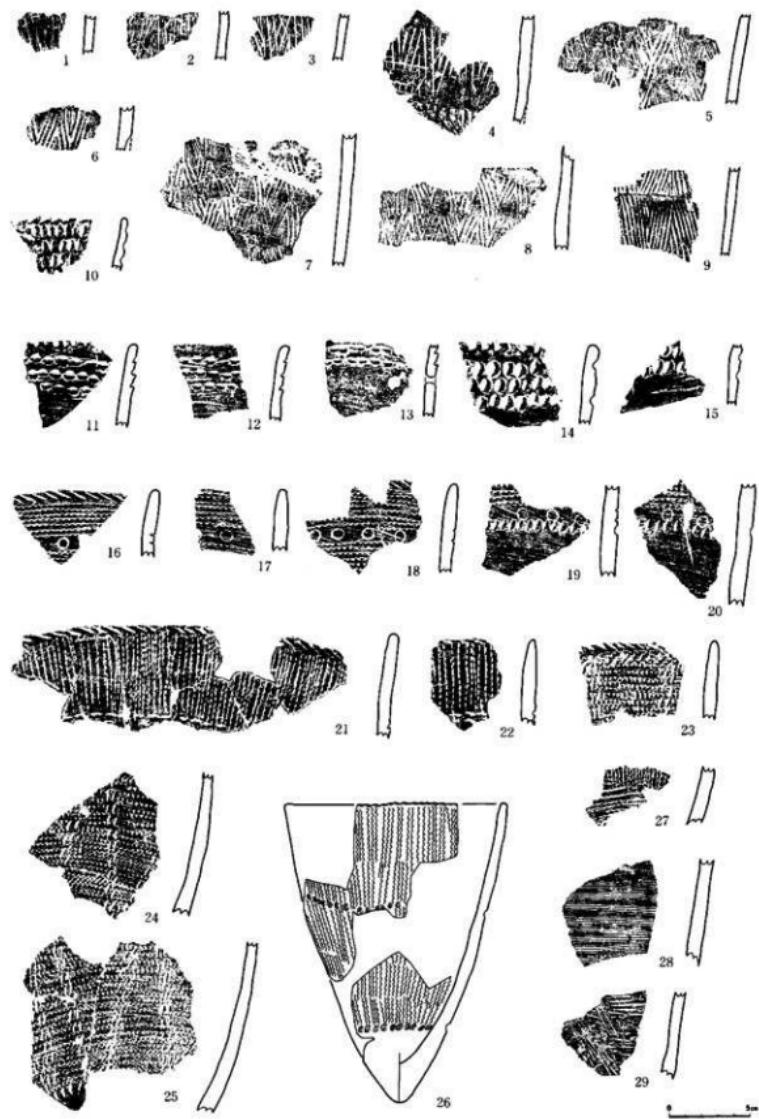
#### 〔キノコ形土製品〕（第14図2）

A E-74グリッドの第II層より、縄文時代後期の土器片とともに土製品が出土している。笠の部分が若干欠けているが、ほぼ完形品である。笠の径が約3cm、茎の径が約2cmと笠の部分が小さめであるがキノコ形土製品とした。手づくねにより作られ、茎の下部が平らになっており、立たせても安定している。一緒に出土している遺物から、縄文時代後期のものと思われる。

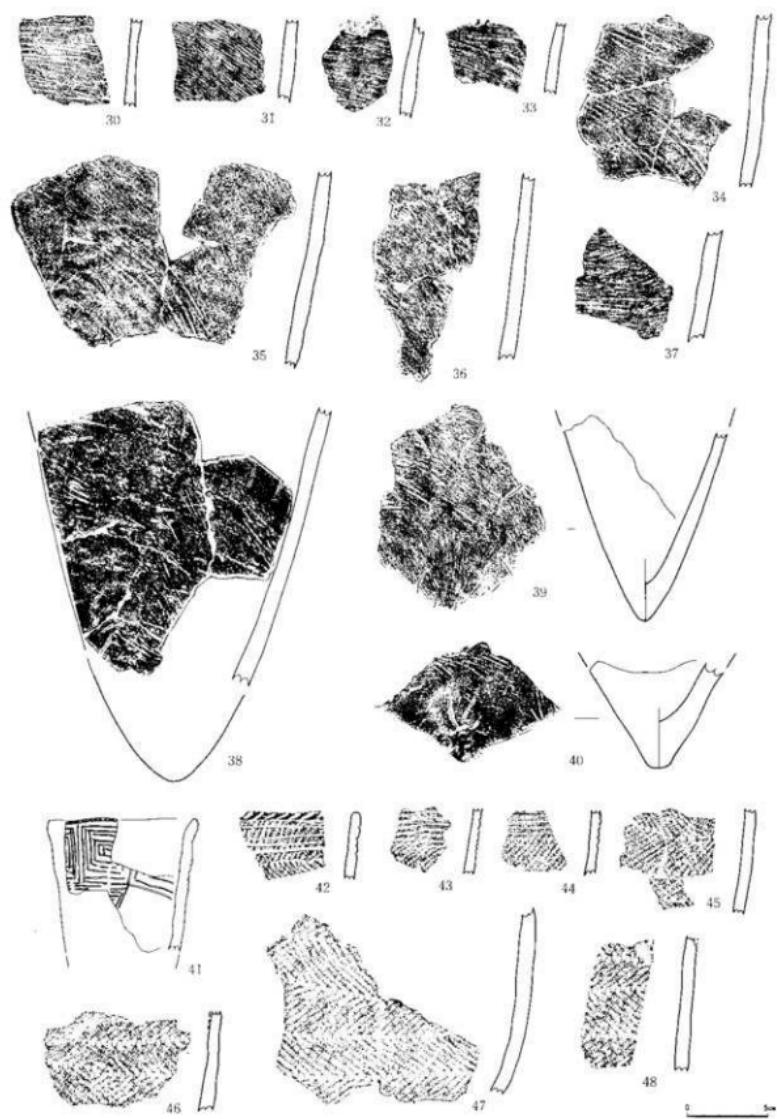
（下山 信昭）



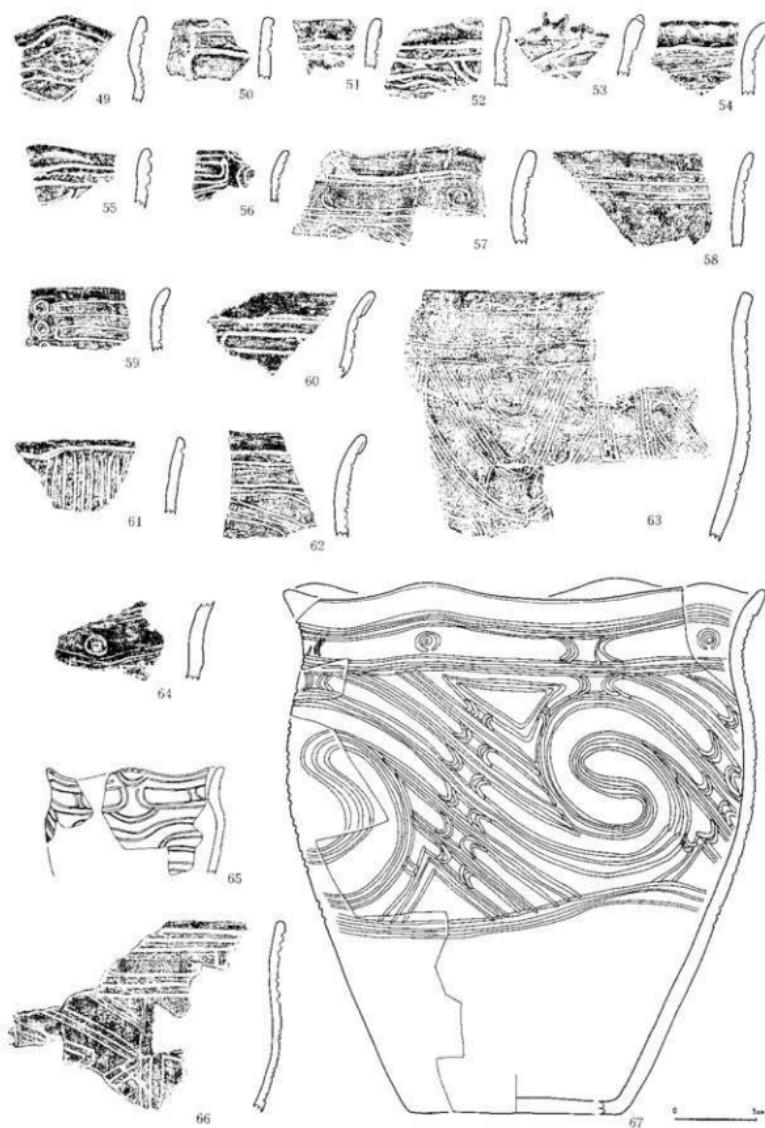
第14図 土 製 品



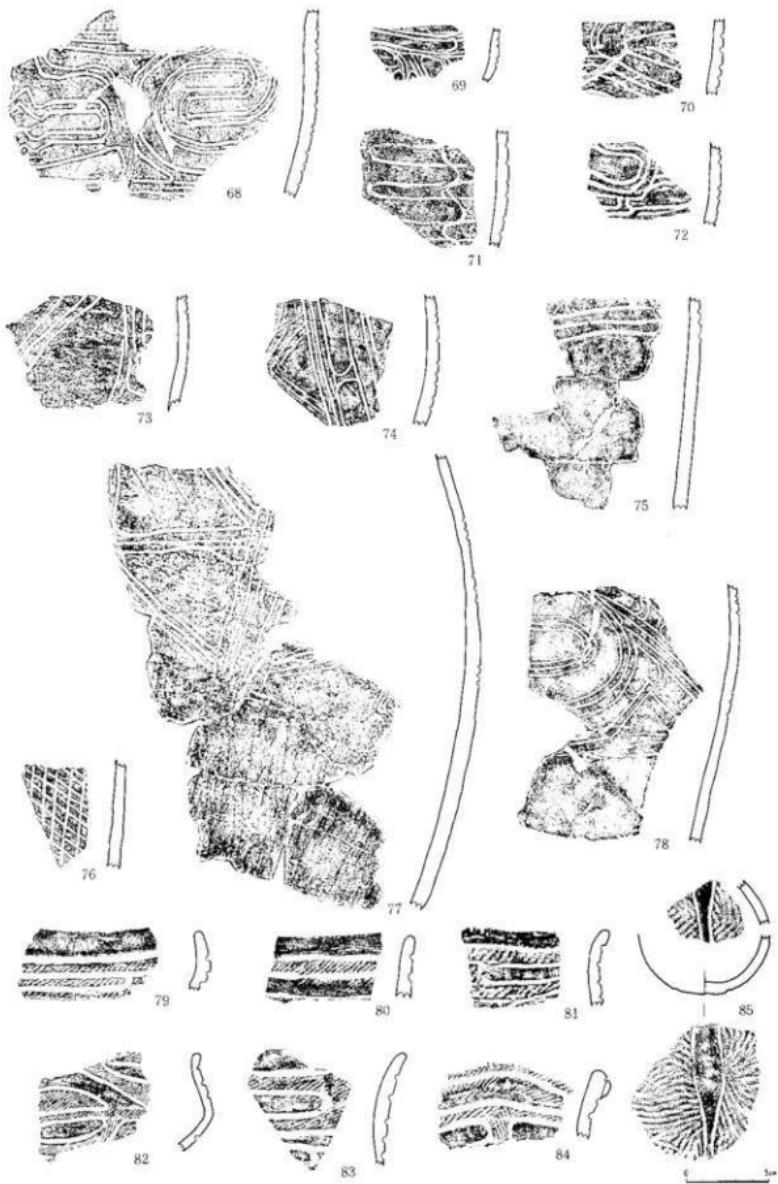
第15図 遺構外出土土器(1)

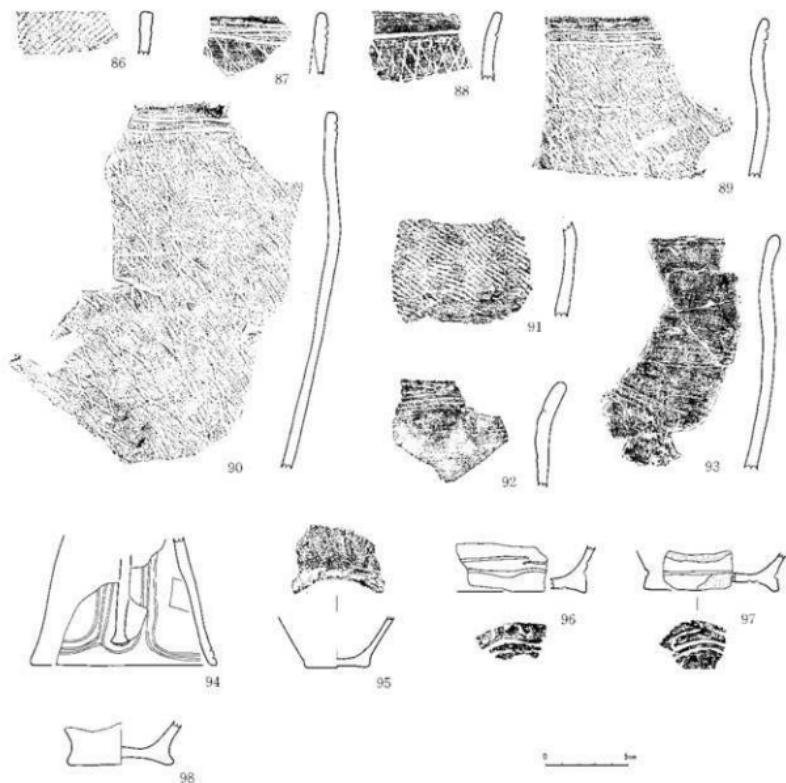


第16図 遺構外出土土器(2)



第17図 遺構外出土土器(3)





第18図 造構外出土土器(5)

第3表 遺構出土土器観察表

図版 番号	出土地区	數	器形	部位	施文文様	内面	胎	土	分類	備考	類別	
1	AM-38	V	深鉢	胴部	重層V字状押型文	織維	浮石混入	I群 南区	P-6	6		
2	AG-44	V	深鉢	胴部	重層V字状押型文	織維	浮石混入	I群 南区	P-5	5		
3	AN-39	V	深鉢	胴部	重層V字状押型文	織維	浮石混入	I群 南区	P-2	8		
4	AM-37	V	深鉢	胴部	重層V字状押型文	織維	浮石混入	I群 南区	P-3	2		
5	AN-39	V	深鉢	胴部	重層V字状押型文	織維	浮石混入	I群 南区	P-11,12	9		
6	AN-38	V	深鉢	胴部	重層V字状押型文	織維	浮石混入	I群 南区	-	7		
7	AN-38	V	深鉢	胴部	重層V字状押型文	織維	浮石混入	I群 南区	P-3	1		
8	AN-38	V	深鉢	胴部	重層V字状押型文	織維	浮石混入	I群 南区	P-9	3		
9	AP-39	V	深鉢	胴部	重層V字状押型文	織維	浮石混入	I群 南区	P-1	4		
10	不明	I	深鉢	口縁部	刻み、刺突文		浮石混入	II群 南区	-	49		
11	AK-38	V	深鉢	口縁部	刻み、貝殻条痕文、刺突文	ナデ	浮石混入	II群 南区	-	24		
12	AL-43	V	深鉢	口縁部	刻み、貝殻条痕文、刺突文	ナデ		II群 南区	P-1	39		
13	AK-43	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文、刺突文、穿孔		浮石混入	II群 南区	P-1	26		
14	AJ-38	V	深鉢	口縁部	刻み、貝殻条痕文、刺突文	ナデ	浮石混入	II群 南区	P-2	21		
15	AG-46	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文、刺突文	ナデ	浮石混入	II群 南区	P-2	38		
16	AG-42	V	深鉢	口縁部	刻み、貝殻条痕文、刺突文(円)	ナデ		II群 南区	P-1	23		
17	AF-42	III	深鉢	口縁部	刻み、貝殻条痕文、刺突文(円)	ナデ	条痕	II群 南区	-	27		
18	AF-41,42	V	深鉢	口縁部	刻み、貝殻条痕文、刺突文(円)	ナデ	条痕	II群 南区	P-1,3	20		
19	AH-42	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文、刺突文(円)、爪形		砂粒混入	II群 南区	P-3	28		
20	AE-43	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文、刺突文(円)、爪形)、貝殻条痕文		砂粒混入	II群 南区	P-1	29		
21	AF-42	V	深鉢	口縁部	刻み、貝殻腹縁文、刺突文		浮石混入	II群 南区	P-1,8,9,11	19		
22	AL-41	V	深鉢	口縁部	刻み、貝殻腹縁文、刺突文	ナデ	浮石混入	II群 南区	P-2	25		
23	AF-42	V	深鉢	口縁部	刻み、貝殻腹縁文、刺突文	ナデ	砂粒混入	II群 南区	P-1	37		
24	AG-42	V	深鉢	胴部	貝殻腹縁文、刺突文	ナデ	浮石混入	II群 南区	P-3	34		
25	AG-42	V	深鉢	胴部	貝殻腹縁文、刺突文	ナデ	浮石混入	II群 南区	P-13	22		
26	AF-41,42	V	深鉢	略完形	刻み、貝殻腹縁文、刺突文			II群 南区	P-1,2,3	48		
43	AG-40	V	深鉢									
27	AF-46	V	深鉢	胴部	貝殻腹縁文			II群 南区	P-1	41		
28	AI-40	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ナデ	浮石混入	II群 南区	P-1	31		
29	AE-40	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文		砂粒混入	II群 南区	P-3	40		
和彌	30	AE-40	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文		浮石混入	II群 南区	P-2	30	
31	AJ-45	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文		浮石混入	II群 南区	P-1	36		
32	AH-47	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文		浮石混入	II群 南区	-	35		
33	AH-42	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文、刺突文		浮石混入	II群 南区	P-1	33		
34	AG-42	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文		砂粒混入	II群 南区	P-4,5	47		
35	AE,AF,AG-40	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ナデ	浮石混入	II群 南区	P-2	42		
36	AJ-40	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ナデ	浮石混入	II群 南区	P-1,2	43		
37	AE-41	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ナデ	浮石混入	II群 南区	P-4	32		
38	AE,AF,AG-40	V	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ナデ	浮石、砂粒混入	II群 南区	P-9	45		
39	AM-38	V	深鉢	底部	貝殻条痕文			II群 南区	P-3	44		
40	AG-46	V	深鉢	底部	貝殻条痕文	ナデ	砂粒混入	II群 南区	-	46		
41	AE-41	V	深鉢	口縁部	刻み、沈縁文	ナデ	浮石混入	II群 南区	P-1,P-2	10		
42	AK-38	V	深鉢	口縁部	刻み、羽状縁文、沈縁文	ナデ	織維	浮石混入	II群 南区	P-3	18	
43	AN-39	V	深鉢	胴部	縹文、沈縁文		織維	浮石混入	II群 南区	P-1	15	
44	AO-39	V	深鉢	胴部	縹文、沈縁文	ナデ	織維	浮石混入	II群 南区	P-1	16	
45	AJ-40	V	深鉢	胴部	羽状縹文		織維	浮石混入	II群 南区	P-1	17	
46	AO-38	III	深鉢	胴部	新東羽状縁文	ナデ	織維混入	II群 南区	-	13		
47	AO-38	III	深鉢	胴部	新東羽状縁文	ナデ	織維混入	II群 南区	P-1	12		
48	AO-38	III	深鉢	胴部	結束羽状縁文	ナデ	織維混入	II群 南区	-	14		
49	AG-77	II	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈縁文	ナデ	砂粒混入	IV群 北区	120		
50	AH-77	II	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈縁文	ナデ	砂粒混入	IV群 北区	-	126	
51	AI-77	II	深鉢	口縁部	折り返し口縁	沈縁文	ナデ	砂粒混入	IV群 北区	-	129	
52	AF-77	II	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈縁文	ナデ	砂粒混入	IV群 北区	-	118	
53	AH-77	II	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈縁文	ナデ	砂粒混入	IV群 北区	-	127	
54	AF-77	II	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈縁文	ナデ	砂粒混入	IV群 北区	-	119	
55	AF-77	II	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈縁文	ナデ	砂粒混入	IV群 北区	-	123	
56	AG-76	II	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈縁文	ナデ	砂粒混入	IV群 北区	-	130	
57	AG-77	II	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈縁文	ナデ	砂粒混入	IV群 北区	-	109	

図版	鈴	出土地区	胎	器形	部位	施文	文様	内面	胎	土	分類	備考	類別			
	58	A F - 72	II	深鉢	口縁部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	111				
	59	A F - 72	II	深鉢	口縁部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	125				
	60	A G - 72	II	深鉢	口縁部	折り返し口縁	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	112				
	61	A G - 72	II	深鉢	口縁部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	117				
	62	A F - 76	II	深鉢	口縁部	折り返し口縁	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	107				
	63	A F - 78	II	深鉢	口縁部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	101				
	64	A G - 77	II	深鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	143				
	65	A G - 76	II	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	110				
	66	A F - 78	II	深鉢	口縁部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	103				
	67	A F - 77	II	深鉢	略完形	小波状口縁	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	147				
第18回	68	A F - 78	II	深鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	132				
	69	A H - 77	II	深鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	144				
	70	A E - 72	II	浅鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	139				
	71	A G - 72	II	深鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	140				
	72	A E - 77	II	深鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	138				
	73	A F - 77	II	深鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	136				
	74	A F - 77	II	深鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	135				
	75	A F - RAN-6	II	深鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	133				
	76	A F - 78	II	深鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	142				
	77	A F - 78,AH-71	II	深鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	131				
	78	A G - 77	II	深鉢	胸部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	134				
	79	A G - 76	II	浅鉢	口縁部	磨消繩文	沈線文	ミガキ	砂粒混入	IV群	北区	124				
	80	A F - 78	II	深鉢	口縁部	磨消繩文	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	106				
	81	A E - 78	II	深鉢	口縁部	小波状口縁	刻み目	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	115				
	82	A F - 76	II	浅鉢	口縁部	磨消繩文	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	114				
	83	A F - 76	II	深鉢	口縁部	磨消繩文	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	108				
	84	A E - 72	II	深鉢	口縁部	小波状口縁	隆蒂	磨	消繩文	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	113	
	85	A G - 76	II	蓋	底部	磨消繩文	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	154				
	86	A F - 70	II	深鉢	口縁部	J.R.御文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	122				
第19回	87	A H - 76	II	深鉢	口縁部	網目状撚糸文	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	128				
	88	A F - 77	II	深鉢	口縁部	網目状撚糸文	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	121				
	89	A G - 76	II	深鉢	口縁部	網目状撚糸文	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	104				
	90	A G - 76	III	深鉢	口縁部	網目状撚糸文	沈線文	ナデ	砂粒混入	IV群	北区	102				
	91	A F - 78	II	深鉢	胸部	無筋繩文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	137				
	92	A H - 77	II	深鉢	口縁部	無文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	116				
	93	A E,A G - 76	II	深鉢	口縁部	無文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	105				
	94	A E,A G - 77	II	台付	底部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	148				
	95	A F - 77	II	深鉢	底部	条痕文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	153				
	96	A F - 77	II	深鉢	底部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	150				
	97	A F - 73	II	深鉢	底部	沈線文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	151				
	98	A F - 75	II	深鉢	底部	無文		ナデ	砂粒混入	IV群	北区	152				

### (3) 石 器

本遺跡で出土した石器の種類は、石鎚・石匙・不定形石器（スクレイパー類、Rフレイク類）・磨製石斧・石錐・敲磨器類（凹石、磨石）などである。以下にそれぞれの石器について概略を記述する。

#### 〔石鎚〕 (第20図1～3)

石鎚は3点出土しており、すべて南区である。1点は表採であるが、他の2点は第V層より出土しており、周辺から縄文時代早期の土器が出土しているので、同時期のものである。形態は、三角形をした無茎のものが1点、他の2点は有茎である。石質は、いずれも珪質頁岩である。

#### 〔石匙〕 (第20図4)

石匙は1点出土している。AL-43グリッドのV層より出土し、大きさは6cmほどの縦型石匙である。石質は、珪質頁岩である。周辺から縄文時代早期の貝殻文系土器が出土しているので、同時期のものと思われる。

#### 〔不定形石器〕 (第20・21図5～28)

不定形石器は、定型的な刃部を有するスクレイパー類（A類）と一部に調整痕がみられるR-フレイク類（B類）に分けられる。

A類：北区より5点出土している。剥片の側縁部に調整が加えられているものが多い。共伴する土器から、縄文時代後期のものである。

B類：南区から1点、その他はすべて北区から出土している。剥片の一部に簡単な調整が加えられしており小型のものが多い。石質は、珪質頁岩及び玉髓質珪質頁岩である。南区出土のものは、出土層位から縄文時代早期のものである。北区出土のものは、縄文時代後期のものである。

#### 〔磨製石斧〕 (第21図29～32)

磨製石斧と思われるものは、4点出土したが全て欠損している。29は、片方の側縁部に擦り切り痕がみられ、刃部は、片刃に近い形状をしており「ノミ」の様な用途の石器と思われる。石質は、緑色細粒凝灰岩である。31は、厚さ11mmの薄い扁平な形態をしている。刃部がないのではっきりしないが、石斧ではない可能性もある。頁岩製である。30は、磨製石斧の基部と思われる。32は、基部が欠損した磨製石斧であるが、欠損部分に敲打痕が認められる。欠損後、敲石として転用した可能性がある。30・32は、輝綠岩製である。29・31は、層位的にも縄文時代早期の石器とみられ、32は、縄文時代後期の石器とみられる。

#### 〔石錐〕 (第22図33, 34)

石錐とみられる石器は、南区から2点出土している。2点とも扁平な円形の石の両側縁を打ち欠いているものである。33は、I層より出土しているが、2点とも縄文時代早期の石器と思われる。

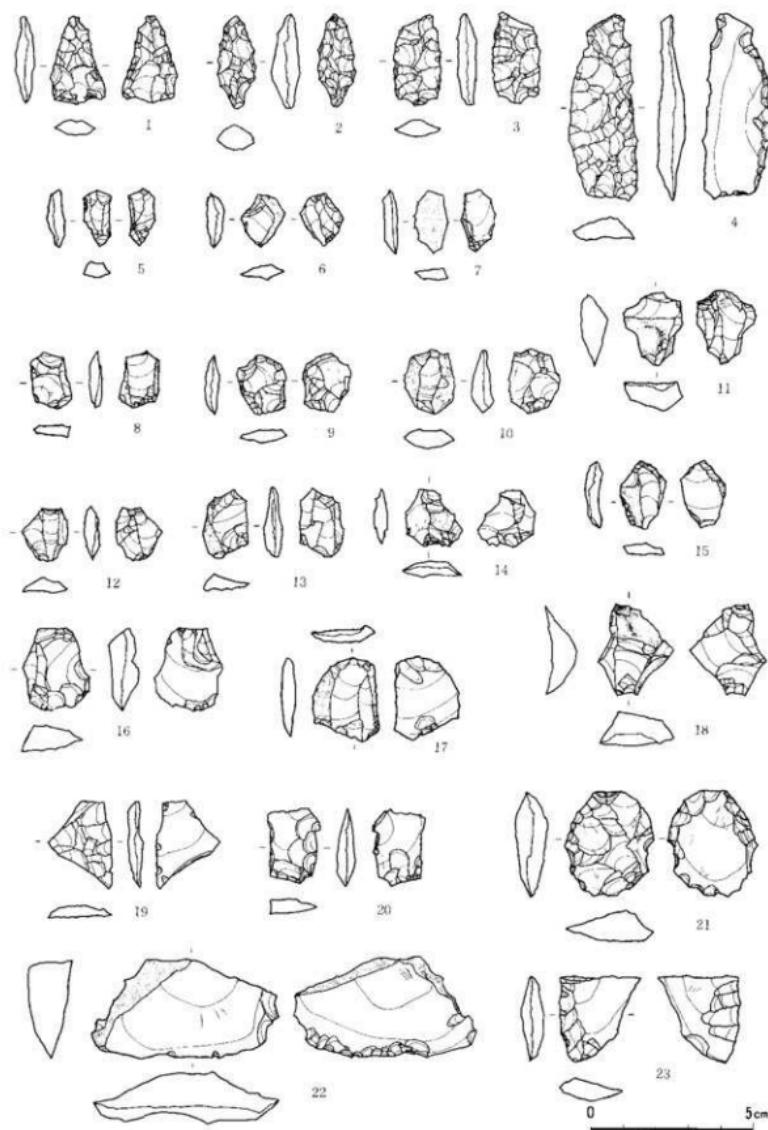
## 〔敲磨器類〕 (第22図35~41)

敲磨器類は、敲きを主とした凹石と磨りを主とした磨石の大きく2種類に分けられるが、両方をかねたものもある。36・37・39は、平坦面に浅い凹みがみられる凹石である。2面を使用しているものと3面を使用しているものがあり、凹みも1面に1箇所と2箇所のものがみられる。36・37は、縄文時代後期のもので、39は、縄文時代早期のものとみられる。40・41は、磨石である。磨り面が2~3面みられる。2点とも縄文時代早期の石器である。35は、石の側縁部に敲打痕のみられる石器である。38は、扁平な円形の石の平坦面に磨り痕がみられ、側縁部に敲打痕がみられる石器である。35・38とも縄文時代早期の石器である。

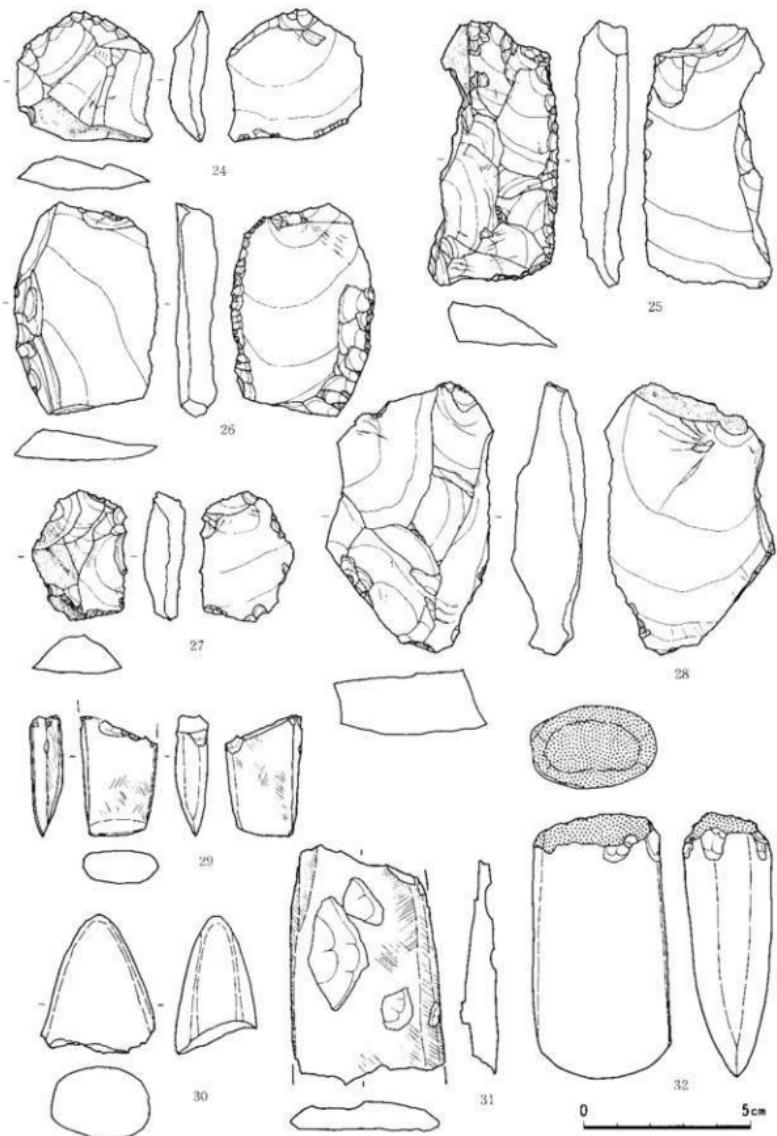
(下山 信昭)

第4表 遺構出土土石器一覧表

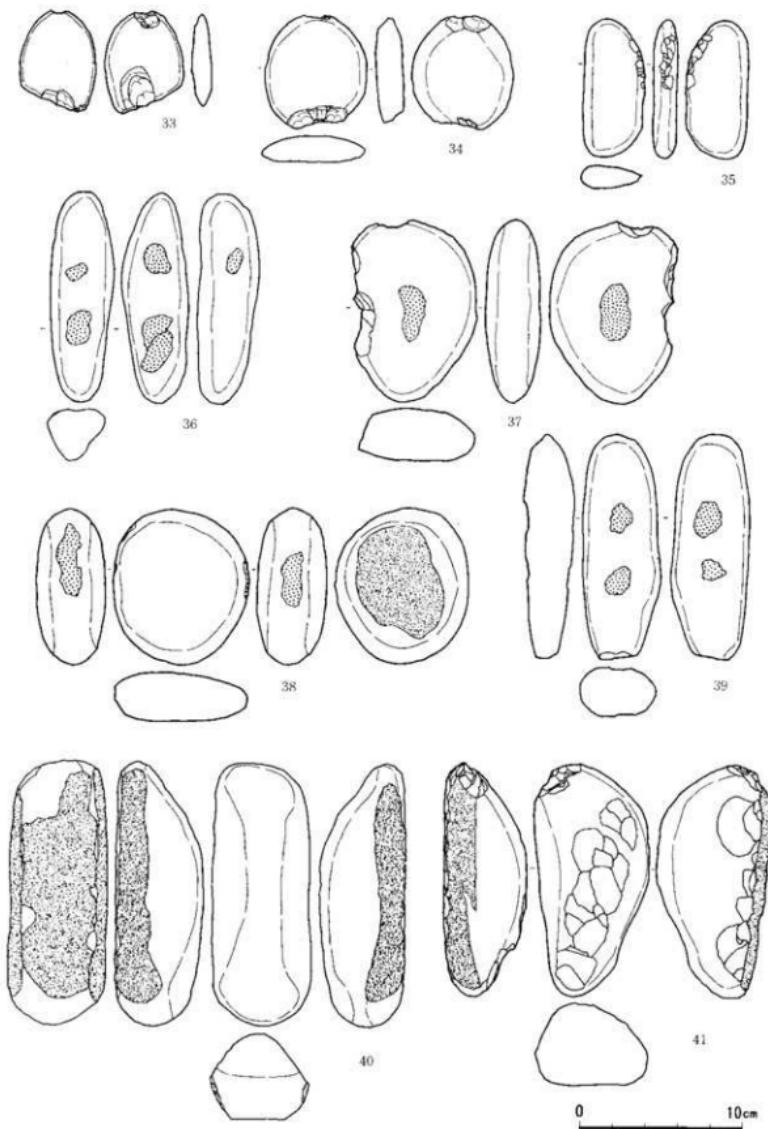
図版 番号	出土地点	駆 長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	石 質	分 類	図版 番号	備 考
第21図 1	A K - 46 V	(28)	17	6	(2.2)	珪質頁岩	石鏃	2	南区, S-1
2	表採	30	12	8	2.3	珪質頁岩	石鏃	5	南区
3	A M - 45 V	(29)	15	6	(2.6)	珪質頁岩	石鏃	4	南区
4	A L - 43 V	60	21	9	7.6	珪質頁岩	石鏃	3	南区, S-1
5	A F - 78 II	18	9	6	0.9	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	20	北区
6	A G - 77 II	17	13	6	1.2	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	21	北区
7	A E - 77 II	21	11	5	0.9	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	6	北区
8	A E - 77 II	18	13	4	0.9	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	7	北区
9	A E - 77 II	19	15	5	1.4	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	8	北区
10	A G - 78 II	20	16	7	2.1	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	22	北区
11	A H - 77 II	23	18	8	3.1	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	23	北区
12	A F - 77 II	17	14	5	1	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	17	北区
13	A F - 77 II	22	14	6	1.6	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	18	北区
14	A F - 77 II	18	17	4	1.2	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	16	北区
15	A H - 78 II	21	14	6	1.5	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	25	北区
16	A H - 78 II	26	16	9	4.9	珪質頁岩	不定形(B類)	24	北区
17	A F - 78 II	26	20	5	2.3	玉髓質珪質頁岩	不定形(B類)	19	北区
18	A F - 76 II	29	24	11	5.5	玉髓質珪質頁岩	不定形(A類)	12	北区
19	A H - 78 II	28	20	5	1.9	珪質頁岩	不定形(B類)	26	北区
20	A E - 78 II	24	16	6	2.1	珪質頁岩	不定形(B類)	9	北区
21	A F - 76 II	33	27	10	8.2	珪質頁岩	不定形(A類)	14	北区
22	A F - 73 II	31	57	16	21.4	珪質頁岩	不定形(B類)	11	北区
23	A F - 76 II	27	25	7	3.2	珪質頁岩	不定形(A類)	13	北区
24	A P - 74 I	42	41	12	18.2	珪質頁岩	不定形(B類)	27	北区
25	A F - 73 II	84	39	16	52.8	珪質頁岩	不定形(A類)	10	北区
26	A F - 77 II	67	44	12	40.1	珪質頁岩	不定形(A類)	15	北区
27	表採	41	29	12	13.8	珪質頁岩	不定形(B類)	28	北区
28	A F - 46 V	85	52	23	65.2	珪質頁岩	不定形(B類)	1	南区, S-1
29	A E - 41 IV	(38)	(24)	10	(14.3)	綠色細粒凝灰岩	磨製石斧	29	南区, S-11
30	A M - 43 I	(43)	(35)	(25)	(41.6)	輝綠岩	磨製石斧	31	南区
31	A E - 44 V	(76)	(47)	(11)	(52.8)	頁岩	磨製石斧	30	南区
32	A E - 73 II	(84)	42	(27)	(151.3)	輝綠岩	磨製石斧	32	北区
第22図 33	A I - 41 I	65	47	12	51.4	安山岩	石錐	38	南区
34	A F - 39 IV	73	63	18	110.6	流紋岩	石錐	36	南区, S-1
35	A E - 41 IV	89	39	15	83.3	凝灰岩	敲磨器	35	南区, S-10
36	A F - 76 II	133	41	399	266.2	安山岩	凹石	44	北区
37	A F - 73 II	116	78	35	413	安山岩	凹石	43	北区
38	A L - 43 V	99	83	43	514.5	安山岩	敲磨器	40	南区, S-1
39	A K - 45 V	144	49	31	287.1	安山岩	凹石	39	南区, S-1
40	A M - 45 IV	167	61	53	820	安山岩	磨石	41	南区
41	A G - 40 V	147	71	51	649.9	砂岩	磨石	37	南区, S-1



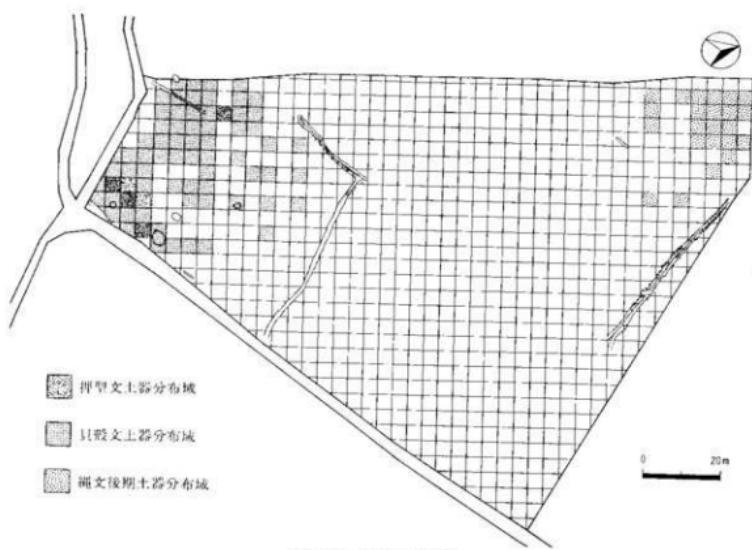
第20図 遺構外出土石器(1)



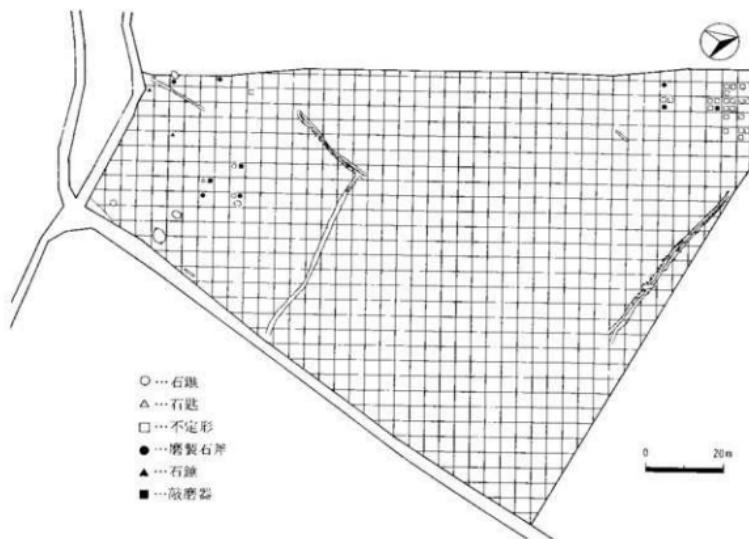
第21図 造構出土石器(2)



第22図 造構外出土石器(3)



第23図 土器出土状況



第24図 石器出土状況

## 第V章 まとめ

本遺跡の調査の成果をまとめると次のようになる。

西張(3)遺跡は、標高20~30mの馬淵川の河岸段丘上に位置しており、現在は、水田及び畑地となっている遺跡である。水田部分は、農地整備により地形が大きく変化している部分があり、遺構・遺物等を確認できなかった。畑地からは、縄文時代の竪穴住居跡1軒、配石遺構1基、土坑3基、溝状ピット3基、古代～中世時代の濠跡1条、近世以降の溝状遺構6条が検出された。竪穴住居跡及び土坑（陥し穴1基）・配石遺構は、確認された地層等から縄文時代早期につくられた遺構とみられる。同様に、溝状ピットも確認された地層等から縄文時代中期～後期につくられた遺構とみられる。濠跡は一部のみ確認しただけで仔細は不明であるが、平成7年に本調査区域の南側を調査し、濠跡の続きを確認できたので、濠跡については次年度の報告書に委ねることにしたい。溝状遺構は、第IV章でも述べたように、境界を示す溝と柵列の可能性もある。

出土遺物は、縄文時代の土器及び石器が中心となっている。時期は、縄文時代早期・前期・後期のものが確認されたが、早期と後期が大半を占める。早期の土器は、日計式の押型文土器と貝殻文系土器が出土している。日計式の押型文土器は、県内でも出土している遺跡数が少なく貴重な資料といえる。また、福地村ではこれまで出土例がなく、最古の縄文土器として注目される。貝殻文形土器は、施文文様から白浜・小舟渡平式と根井沼・寺の沢式の2種類に大きく分けられるが、散在して出土したため層位的にとらえることはできなかった。貝殻文系の土器群とともに石器（石鎌・石匙・不定形・磨製石斧・石錘・敲磨器類）も出土している。後期の土器群は、おむね十腰内I式に比定される土器群である。破片資料がほとんどで、廃棄されたものと思われる。土器とともに土製品（円盤状土製品・キノコ形土製品）と石器（不定形・磨製石斧・凹石）も出土している。

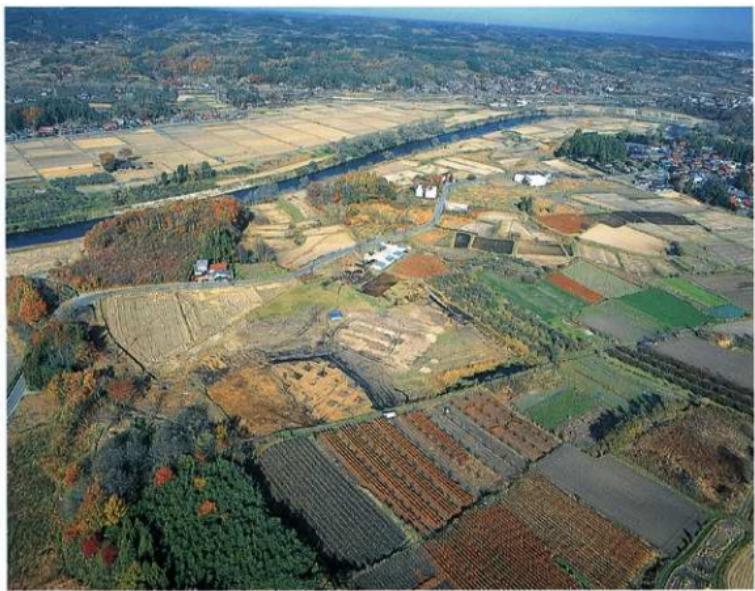
以上のことから、本遺跡は、縄文時代早期・前期・後期、古代～中世、近世以降にわたる遺跡であることが確認された。

（調査者一同）

### [引用参考文献]

相原淳一	1982	『概説日計式土器群の成立と解体』	赤い本 初刊号
青森県教育委員会	1983	『青森県の中世城館』	
青森県教育委員会	1983	『鶴平(1)遺跡』	青森県埋文報第72集
青森県教育委員会	1983	『鶴窪遺跡』	青森県埋文報第76集
青森県教育委員会	1984	『豆巻沢遺跡』	青森県埋文報第83集
青森県教育委員会	1985	『光場遺跡』	青森県埋文報第93集
青森県教育委員会	1989	『館野遺跡』	青森県埋文報第119集
青森県教育委員会	1991	『中野平遺跡』（縄文時代編）	青森県埋文報第134集
青森県教育委員会	1991	『雷遺跡・西山遺跡』	青森県埋文報第136集

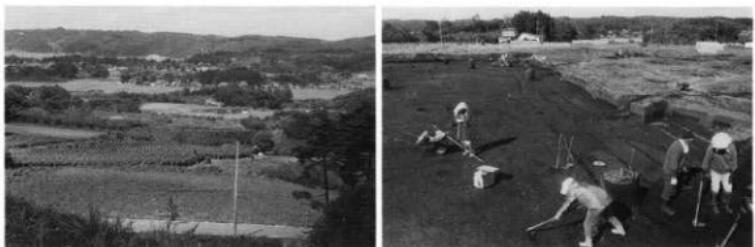
杉山 武	1980	『白浜式・小舟渡平式土器にかかる館平遺跡出土の早期貝殻文土器について』 『奥南』 創刊号
八戸市教育委員会	1990	『見立(2)山遺跡』 八戸市埋文報第38集
沼館愛三	1981	『南部諸城の研究』
三沢市教育委員会	1988	『根井沼(1)遺跡』 緊急発掘調査報告書II 三沢市埋文報第4集
三沢市教育委員会	1988	『根井沼(1)遺跡』 発掘調査報告書III 三沢市埋文報第5集
盛岡市教育委員会	1983	『大館遺跡群(大新町遺跡)』 昭和57年度発掘調査概報



西張(3)遺跡空撮（南→）

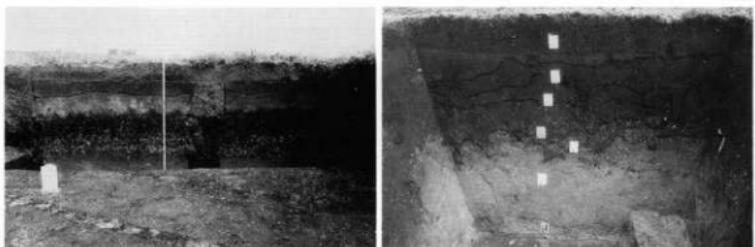


写真 1



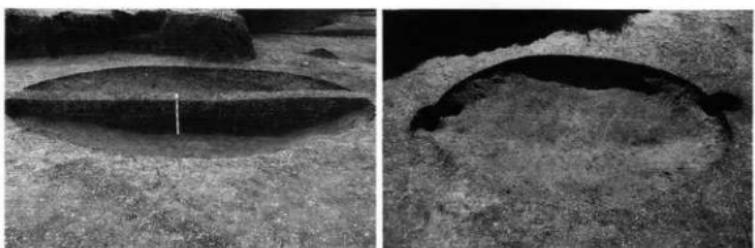
遺跡遠景（東→）

調査風景



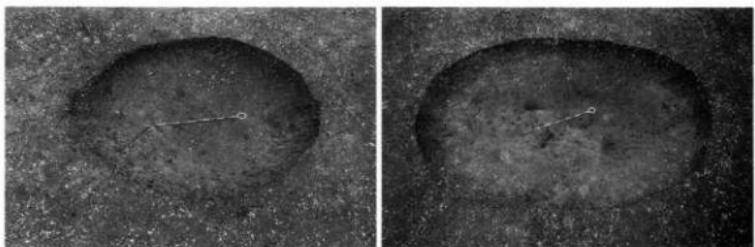
基本層序 (AK-46)

基本層序 (AW-89)



第1号竪穴住居跡 (セクション)

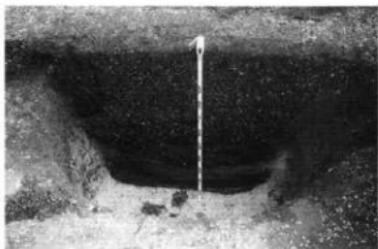
第1号竪穴住居跡 (完掘)



第1号土坑 (完掘)

第2号土坑 (完掘)

写真2 掘出遺構(1)



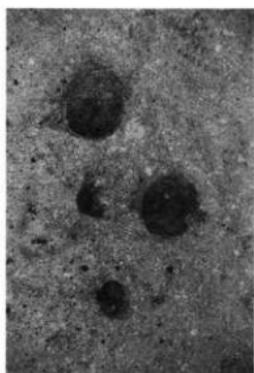
第3号土坑（セクション）



第3号土坑（完掘）



第1号溝状ビット（完掘）



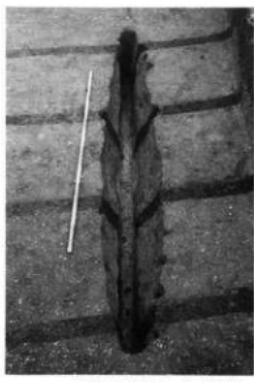
第3号土坑（ビット）



第2号溝状ビット（セクション）



第2号溝状ビット（完掘）



第3号溝状ビット（完掘）

写真3 検出遺構(2)



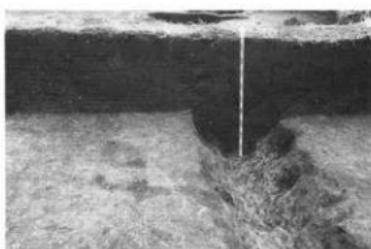
第1号溝跡（完掘）



第1号溝跡（セクション）



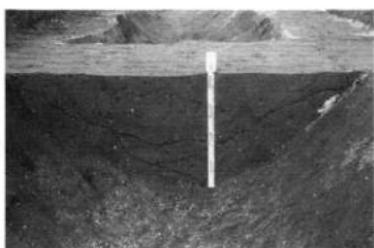
第1・2号溝状造構（完掘 西→）



第1・2号溝状造構（セクション）



第1・2号溝状造構（完掘 東→）

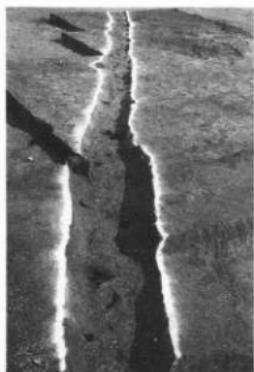


第3号溝状造構（セクション）



第3号溝状造構（完掘 東→）

写真4 検出造構(3)



第4号溝状遺構（完掘 北→）



南区遺物出土状態（西→）



第5・6号溝状遺構（完掘 南→）



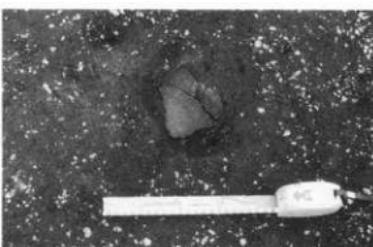
第1号配石遺構



貝殼文土器・石器出土状態（南区）



北区遺物出土状態（西→）



押型文土器出土状態（南区）

写真5 検出遺構(4)

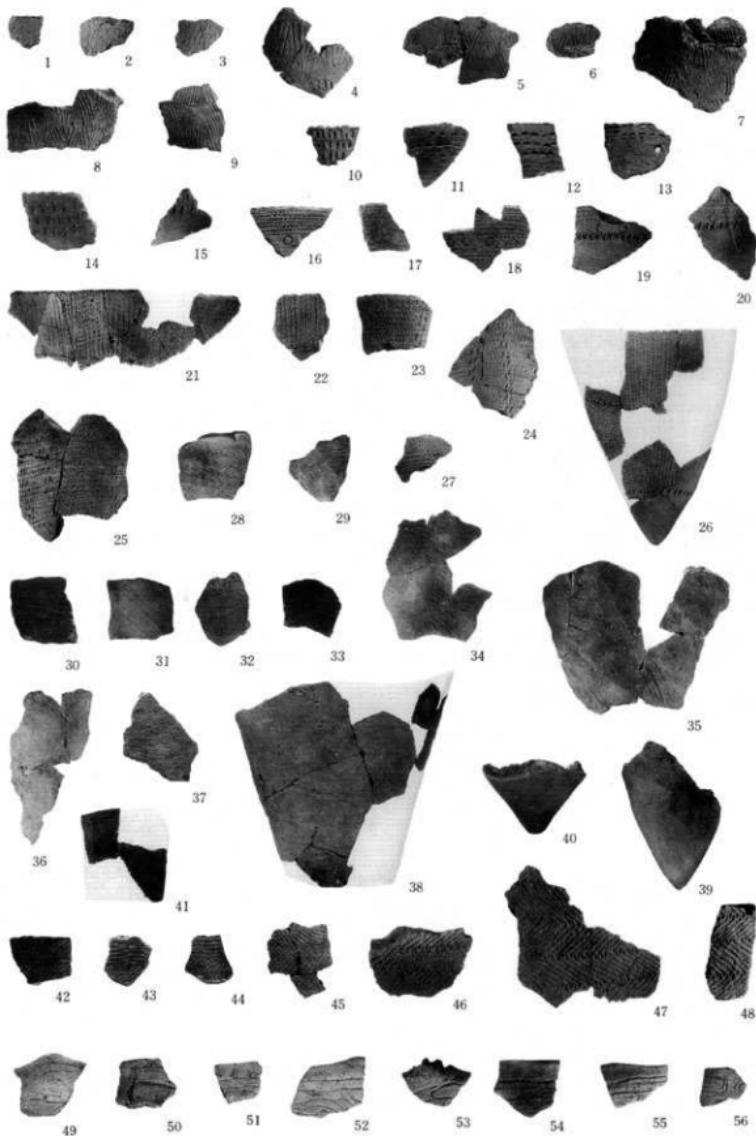


写真6 土 器 1

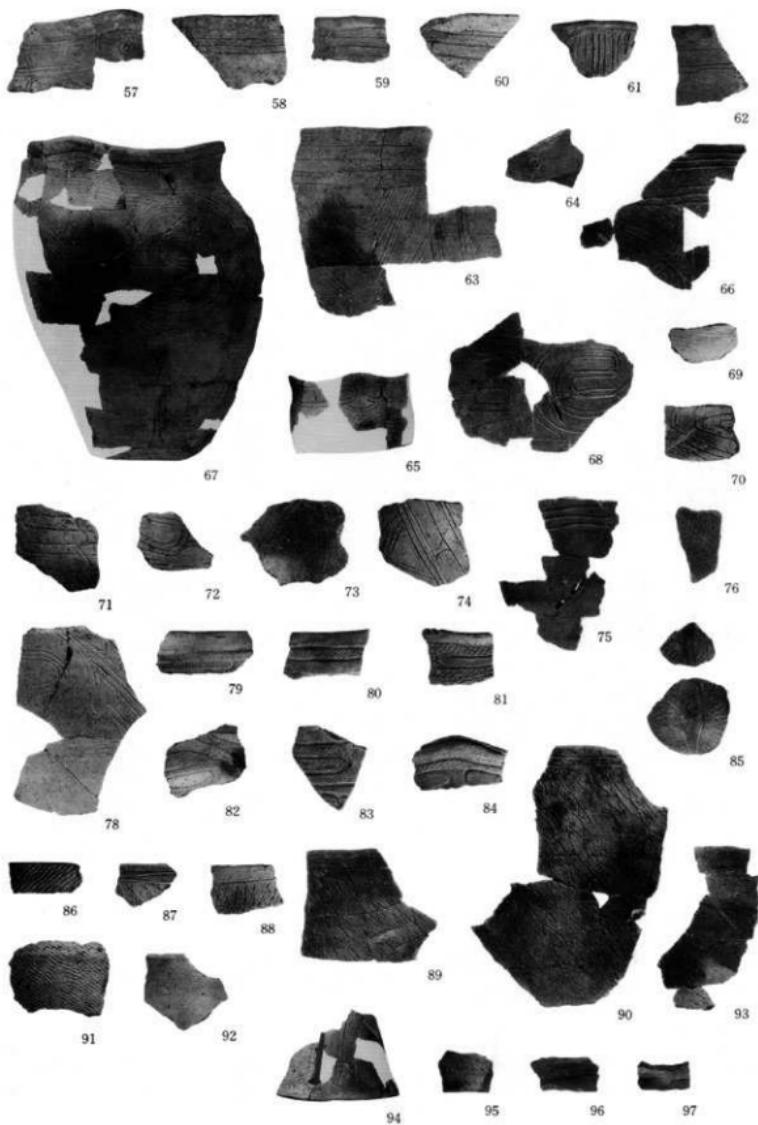


写真7 土 器 2

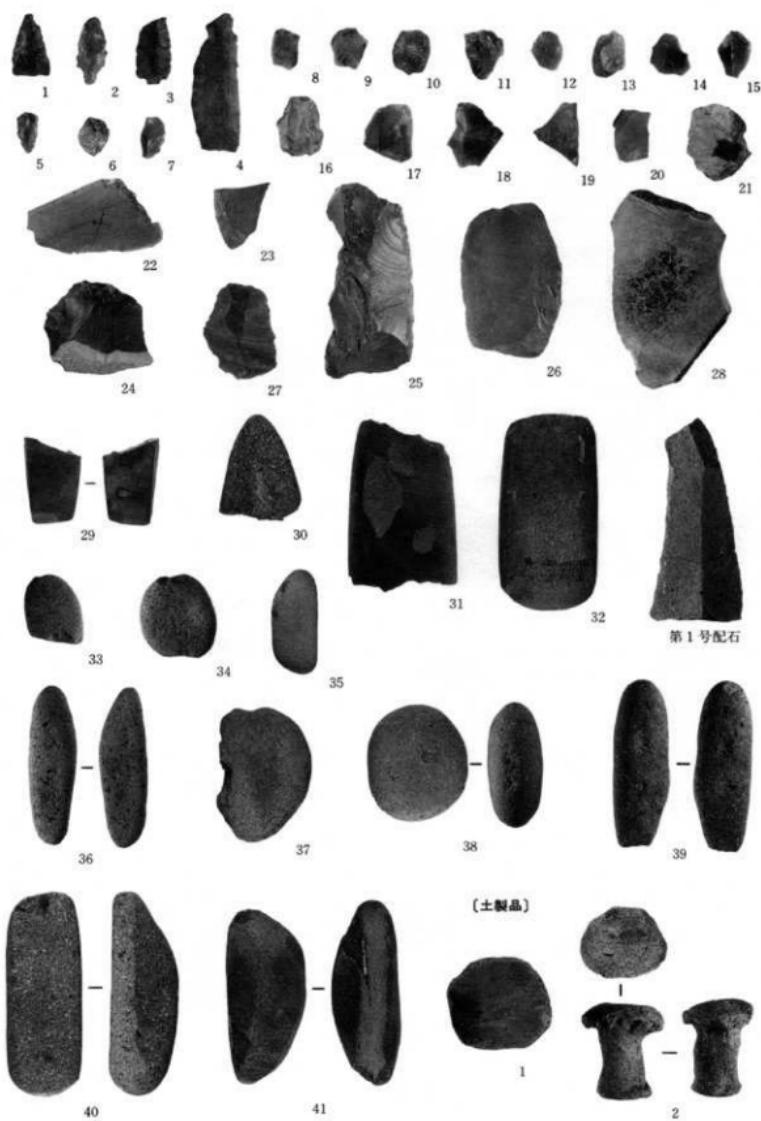


写真8 石器・土製品

## 報告書抄録

ふりがな	にしほり(3)いせき							
書名	西張(3)遺跡							
副書名	東北新幹線建設工事(変電所)に係る埋蔵文化財発掘調査							
卷次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第197集							
編著者名	北林八洲晴、下山信昭							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 青森県青森市新城字天田内152-15 TEL0177-88-5701							
発行年月日	1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面 積 m <sup>2</sup>	調査原因	
にしほり 西張(3)遺跡	青森県三戸郡福地 村大字法郎間字大 道ノ下16-4	市町村 02-447	遺跡番号 64-034	40° 27° 43°	141° 24° 24°	19940822 ~ 19941118	3,700	東北新幹線建 設工事(変電 所)に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
西張(3)遺跡	集落跡	縄文時代 早期	竪穴住居跡 土坑 集石遺構	1軒 3基 1基	縄文時代早期 <土器> 日計式 白浜・小舟渡平式 根井沼・寺の沢式 <石器> 石鍬、石匙、不定形 磨製石斧、石錘、 敲磨器	縄文時代前期 <土器> 早稻田6類	日計式押型文土器	
		前期	縄文中期~後期	溝状ビット	3基	縄文時代後期 <土器> 十腰内I式 <石器> 不定形、磨製石斧 敲磨器 <土製品> 円盤状土製品 キノコ形土製品		
		後期						
	館跡	古代以降	濠跡	1条				
		近世以降	溝状遺構	6条				

青森県埋蔵文化財調査報告書 第197集

### 西張(3)遺跡発掘調査報告書

－東北新幹線建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行年月日 平成 8 年 3 月 31 日

発 行 青 森 県 教 育 委 員 会

〒030

青 森 市 新 町 二 丁 目 3 - 1

編 集 青 森 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 セン タ ー

〒038

青 森 市 新 城 字 天 田 内 152 - 15

[TEL] 0177 (88) 5701

[FAX] 0177 (88) 5702

印 刷 高 金 印 刷 株 式 会 社

〒038 青 森 市 千 刈 二 丁 目 1 の 30

[TEL] 0177 (81) 0519 - 2244